

垂水遺跡発掘調査報告書Ⅰ

- 垂水遺跡第24次発掘調査 -

平成17（2005）年3月

吹田市教育委員会

序 文

垂水遺跡は、弥生時代の高地性集落として広く知られている遺跡です。その存在は、昭和初期の円山町一帯の造成時に弥生土器や石器などが採集されたことから知られており、その後の採集活動や発掘調査により、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であることがわかっています。

今回、報告致します垂水遺跡第24次発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての資料を数多く確認することができました。中でも注目されるのが、古墳時代の溶解途中の鏡片を検出したことです。このような状態での鏡の出土は、全国的に見ても例がなく、これは吹田市ばかりでなく、日本の古墳時代研究に一石を投ずる資料といえます。

本書では、この鏡片をはじめとする発掘調査の成果を報告しておりますが、これにより市民の皆様が地域の歴史を知っていただく機会となれば幸いです。

平成17（2005）年3月

吹田市教育委員会

教育長 椿 原 正 道

例 言

1. 本書は、平成10(1998)年度に吹田市垂水町1丁目731-28、-29において共同住宅建築に伴う事前調査として実施した、垂水遺跡第24次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本報告書の執筆は堀口健二・西本安秀・田中充徳が行なった。執筆分担は第IV章(5)を田中・堀口、第IV章(4)を西本・田中、その他を堀口が行なった。編集作業は堀口が行なった。
4. 本文中の遺物番号は、遺物観察表・挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器・木製品は1:4、土器拓本は1:2、銅製品・石器は3:4をそれぞれ基本とした。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.(東京湾標準潮位)を示す。
6. 発掘調査に要した経費は、事業者である東京生命保険相互会社の負担による。発掘調査においては、事業者をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して感謝いたします。
7. 発掘調査および報告書作製にあたっては、次の各位よりご教示、ご協力をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略、氏名・組織名とも五十音順、職名等は調査当時のもの)
北野重(柏原市教育委員会)、杉本隆史(関西大学工学部教授)、福永伸哉(大阪大学文学部助教)、森田稔(文化庁文化財保護部美術工芸課)、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、香川県歴史博物館、(財)徳島県埋蔵文化財センター
8. 発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。
大城道則、嘉幡茂、花崎晶子、赤塚亨、小田尚幸、海邊博史、佐藤健太郎、秋山芳恵、大西文代、小川里美、木松安紀子、桑原暢子、小久保隆、高井明美、長谷部裕子、林裕子、日置智、湯浅直子

目 次

第I章 位置と環境	1
(1) 地理・歴史的環境～弥生・古墳時代の集落遺跡について	1
(2) 垂水遺跡の既往調査	2
第II章 調査の経過と方法	3
第III章 調査の成果	5
(1) 基本層序	5
(2) 検出遺構と遺構出土遺物	7
(3) 遺物包含層出土の遺物	15
第IV章 まとめ	26
(1) 検出遺構について	26
(2) 外来系土器について	30
(3) 内面水銀朱付着土器について	32
(4) 破碎された銅鏡について	32
(5) 総括	34
遺物観察表	37

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図	2	第14図 第8層出土遺物(3)	19
第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図	4	第15図 第9層出土遺物	20
第3図 調査区配置図	4	第16図 第5面土器群	21
第4図 北壁土層断面図	6	第17図 第6面土器群(1)	22
第5図 遺構平面図(1)	8	第18図 第6面土器群(2)	23
第6図 西壁断面に現れた噴砂	10	第19図 第10～13層出土遺物	24
第7図 第2面木杭立面図	10	第20図 出土層位不明遺物	25
第8図 遺構平面図(2)	11	第21図 鋳造関連遺物	26
第9図 遺構平面図(3)	13	第22図 銅製品実測図	27
第10図 遺構出土遺物	14	第23図 弥生土器・古式土師器拓本	28
第11図 第2～7層出土遺物	16	第24図 石器実測図	29
第12図 第8層出土遺物(1)	17	第25図 仿製鏡復元図	33
第13図 第8層出土遺物(2)	18		

写真図版目次

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 図版 1 | 第 1 面遺構 | 図版 13 | 弥生土器(2) |
| 図版 2 | 第 2 面遺構 | 図版 14 | 弥生土器・古式土師器(1) |
| 図版 3 | 第 3 面遺構 | 図版 15 | 古式土師器(2) |
| 図版 4 | 第 4 面遺構 | 図版 16 | 古式土師器(3) |
| 図版 5 | 第 5・6 面遺構 | 図版 17 | 古式土師器(4) |
| 図版 6 | 第 5・6 面遺物出土状況(1) | 図版 18 | 古式土師器(5) |
| 図版 7 | 第 5・6 面遺物出土状況(2) | 図版 19 | 古式土師器(6) |
| 図版 8 | グリッド部各遺構面 | 図版 20 | 古式土師器(7) |
| 図版 9 | 土層断面(1) | 図版 21 | 古式土師器(8)・韓式系土器 |
| 図版 10 | 土層断面(2) | 図版 22 | 鑄造関連遺物・青銅器・木器 |
| 図版 11 | 発掘調査風景 | 図版 23 | 平安時代・中世・近世遺物 |
| 図版 12 | 弥生土器(1) | 図版 24 | 石器 |

第I章 位置と環境

(1) 地理・歴史的環境～弥生・古墳時代の集落遺跡について

吹田市は大阪府北部に位置し、南は大阪市と隣接し、北は箕面市、東は茨木市、摂津市、西は豊中市と境界を接する。吹田市を地形的に見ると、市域北部は、侵食谷の発達した標高80m以下のなだらかな千里丘陵が占める。南部は主に淀川や神崎川などの河川によって形成された平野が広がり、JR吹田駅付近から南側にかけては、縄文海進時に潮流によって運ばれた砂で形成された吹田砂堆とよばれる微高地がある。平野部については、吹田砂堆を挟んで東側を安威川低地、西側を神崎川低地に分けられる。

吹田市域における弥生・古墳時代の代表的な集落遺跡としては、垂水遺跡、北泉遺跡、垂水南遺跡、蔵人遺跡、榎坂遺跡、五反島遺跡、中ノ坪遺跡、七尾東遺跡、目依遺跡などが上げられる。

ここで垂水遺跡近辺の遺跡について見ると、北泉遺跡は、垂水遺跡の東約500mにあり、千里丘陵南端付近の平野部に面した急峻な傾斜面に立地する。近年新しく確認された遺跡であり、発掘調査も1件のみであるが、弥生時代前期と弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器などがまとめて出土し、その中でも朱色に彩色を施した弥生時代後期の壺、外来系土器、銅鏃などが特筆される。住居跡などの明確な遺構は確認されておらず、土層断面から、近世の地滑りの痕跡、液状化現象による噴砂などが観察でき、土層自体も上方から滑落したような堆積状況を示していた。このことから集落の本体は、調査地点背後の丘頂部に存在した可能性が高いと考えられる。

垂水南遺跡は、垂水遺跡の南約300mの神崎川低地上に立地する、古墳時代を中心とする集落遺跡である。これまで竪穴式住居、掘立柱建物、矢板の施された水田、鉄器生産関連の焼土坑、河道など、多数の遺構・遺物が発見されている〔網干1981〕。特に、第48次調査では、鍛冶生産関連遺構と思われる焼土坑、鉾津などが出土しており、第51次調査では、加熱痕の少ない布留式甕の絵画土器が出土している〔吹田市教委1996〕。第57次調査では、古墳時代の河道と、それに付随する護岸施設が検出されている。護岸施設は河岸の傾斜面に小枝を敷き詰めたりして、自然木の横木を杭列に固定して護岸を施していた。さらにそれら部材を縛ったと思われる、紐状の桜の皮も同時に出土している。第58次調査では、河道内から初期須恵器・韓式系土器・外来系土器などを含む多量の古墳時代の土器とともに、弥生時代中期後半から後期にかけての弥生土器も出土したことが注目される。これにより垂水南遺跡が弥生時代中期に遡ることが確実となった。

蔵人遺跡と榎坂遺跡は、垂水遺跡の西方約800mの地点にある。蔵人遺跡では、これまで弥生時代後期の土器や古墳時代前・中期の古式土師器や須恵器などの出土が知られていたが、第10次調査において、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器がまとめて出土している。また、榎坂遺跡においても、近年の調査（第2次・第6次）において、弥生時代後期の遺物を含みつつ、古墳時代の遺構・遺物が数多く確認されている。



- | | | | | |
|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 垂水遺跡 | 3. 櫻坂遺跡 | 5. 蔵人遺跡 | 7. 七尾東遺跡 | 9. 中ノ坪遺跡 |
| 2. 北泉遺跡 | 4. 垂水南遺跡 | 6. 五反島遺跡 | 8. 目依遺跡 | |

第1図 周辺の遺跡分布図 (S=1/40000 上方が北)

五反島遺跡は、垂水遺跡からは南へ約1.6kmの地点とやや離れた地点にあるが、昭和61(1986)年度に実施した調査では、古墳時代・平安時代・中世の河道跡が検出され、河道内より大量の弥生時代・古墳時代の遺物が出土している。現在のところ、集落跡は確認されていないが、吹田市における弥生・古墳時代を考える上で重要な遺跡といえる。

(2) 垂水遺跡の既往調査

垂水遺跡は、吹田市円山町、垂水町1・2丁目にあり、標高55mほどの丘陵部からその南側の平野部にかけて広がっている。垂水遺跡は、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であるが、なかでも中心となるのが弥生時代の集落跡で、大阪湾周辺の代表的な高地性集落といえる。

垂水遺跡は、昭和初期の住宅造成工事に伴って、垂水神社北東の丘陵上で発見された。その

後も市民等による積極的な資料採集が行なわれ、多くの弥生土器や石器に加え、昭和30年代には、銅鏡の石製鋳型の可能性が考えられる転用砥石が採集されている[増田2004]。もしこれが石製鋳范であれば、近畿地方で確認できる唯一のものである[三船・清水・中井2004]。しかしながら昭和30年代以降は、丘陵の西半部も大きく削平され、遺跡の大半は実態が明らかにされないまま破壊を被ったと考えられる。

垂水遺跡における本格的な発掘調査は、垂水神社の裏山において、昭和48(1973)年から同51(1976)年にかけて、関西大学考古学研究室・吹田市史編さん室が共同で実施した第1～5次調査がある。発掘調査の結果、後期旧石器時代の石器類、弥生時代中～後期の竪穴式住居跡4棟・掘立柱建物跡1棟・焼土坑・甕棺墓、中世墓など、旧石器時代から中世にわたる遺構・遺物が確認された[網干1981]。そして、弥生時代の集落については前期に始まり、後期に盛時をもつと考えられるに至った。

その後も垂水遺跡においては発掘調査が行われ、丘陵裾部における第23次調査では、弥生時代後期後半を主体とする遺物包含層と、加工木材を伴う溝などが確認されている[吹田市教委1998]。また、同じく裾部で実施した第26次調査では、ほぼ完形品の弥生時代前期の壺や中期後半の甕、桃核の入った後期の甕、それに古墳時代前期の土師器などがまとまって出土している。

さらに、丘陵下平野部における発掘調査でも、現地表面より2～3m以上深い地点より、弥生時代の遺構・遺物がみられるようになっており、当該期の集落は丘陵上部だけでなく、丘陵裾部から平野部にかけても展開することが判ってきた。

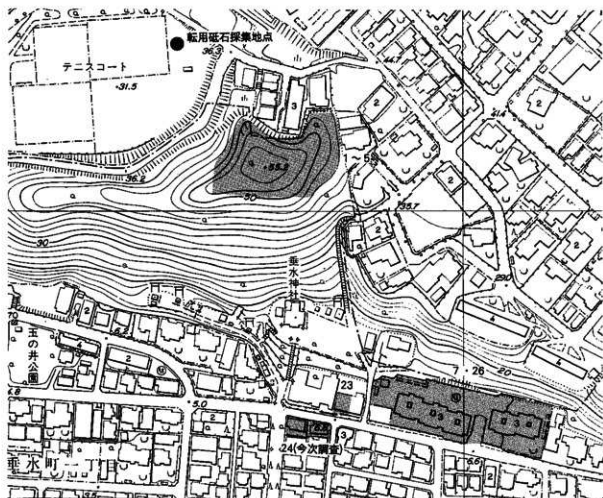
【引用・参考文献】

- ・網干善教編1981 「考古編」『吹田市史』第8巻 吹田市史編さん委員会
- ・吹田市教育委員会1996 「垂水南遺跡の発掘調査」『平成7年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- ・吹田市教育委員会1998 「垂水遺跡の発掘調査」『平成9年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- ・増田真木2004 「垂水遺跡出土鏡范の概要」『鏡范研究』Ⅰ 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代銅金研究会
- ・三船温尚・清水康二・中井一夫2004 「垂水遺跡採集の石製品について」『鏡范研究』Ⅰ 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代銅金研究会

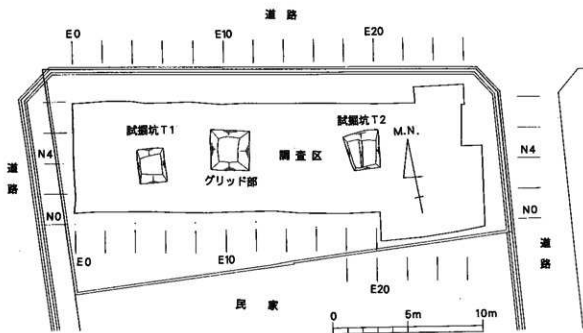
第Ⅱ章 調査の経過と方法

今回の発掘調査は、共同住宅の建築工事に伴う事前調査である。当該工事予定地は垂水遺跡の範囲内に位置することから、先ず平成10(1998)年3月18日に、当該地内に2m四方の試掘坑を2箇所設定して(T1区・T2区)、確認調査を行なった。その結果、複数の遺構面上に溝・落ち込み・土坑などを検出し、弥生時代後期から中世にわたる遺物が出土した。予定される建築工事が着工されると検出した遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行なった結果、建築工事に先立って、拡大調査を実施したものである。

発掘調査は、建築予定建物の基礎構造に合わせ調査区を設定し、平成10(1998)年4月22日よ



第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図：数字は調査次数（S=1/2500 上方が北）



第3図 調査区配置図

り同年6月18日の間に行なった。先ず東西26m×南北7m、深さ2.2m、面積約205m²(突出部を含まず)の調査区を1箇所設定し、さらにその底面中央やや西寄りに2.5m四方、深さ70cmのグリッドを一箇所設定する二段掘りの形で行なった。現代の盛土・攪乱層は重機を使って掘り下げ、さらに下層については人力により注意深く掘削した。そして、各遺構面から遺構を検出し、これらの遺構に伴って弥生時代から江戸時代にわたる各種遺物が出土した。検出した遺構および遺物の出土状況などについては、各時期の遺構面毎に詳細に観察し、写真撮影や図面の作成などによる記録作業を行なった。

第三章 調査の成果

(1) 基本層序

調査地点地表面の標高はT.P.約6.3m前後である。調査区内の堆積層は、概して北東に高く南西に低い傾斜地形を示す堆積構造を呈していた。今次の調査地点は、調査地背後の千里丘陵が平野部に向かう変換点に位置しており、その影響を受けたものと考えられる。

調査区内の地質は、砂礫系の自然堆積層と、黒っぽい色のシルト(泥土)・粘土層からなる土壌化層が交互に堆積していた。特に砂礫層は、一部にシルトを交えて、非常に薄くて細かな堆積を順次繰り返している様子が看取できた。そのため、遺構面との関係を明確にする意味で、隣接しあつて類似した地質を「層群」と認識して一まとめにし、整理段階において大きく14層に層序区分した。

地質の注記は整理段階において、土色帖[小山・竹原1987]に準じて土色名を命名し直した。粒径区分はアメリカ法によつた。現地表以下の基本層序は次の通りである。

・北壁断面(第4図、図版9上段、図版10下段)

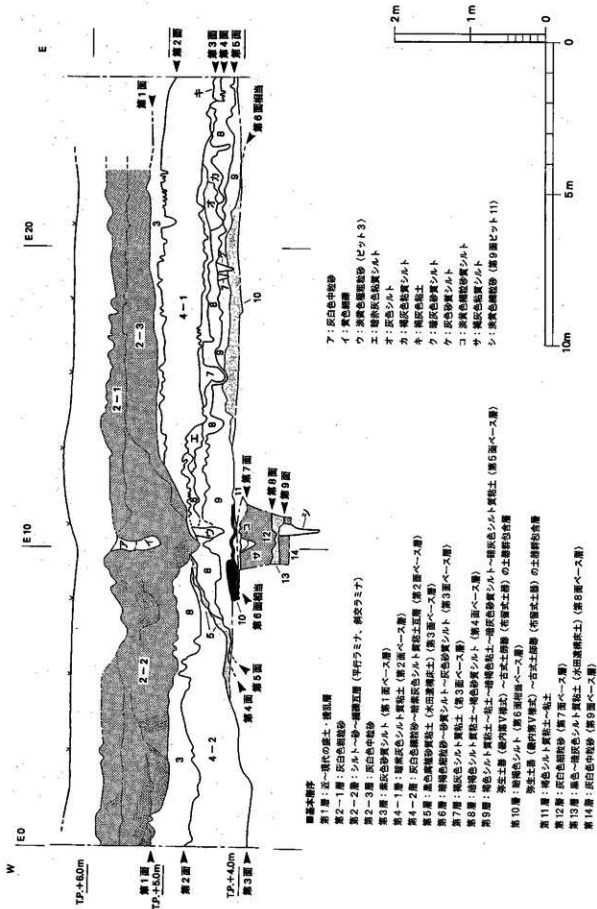
第1層：近代から現代にかけての盛土と攪乱層である。層厚は40～60cm。図化部分では見られないが、西壁断面の一部において、近代以降の旧耕作土(暗青灰色粘質シルト)が部分的に残存する。

第2層：第1面覆土層。ショベルカーを投入して一括して掘削したため、層位的な掘り分けは行っていないが、壁面より不整合面が観察でき、大きく3層に層序区分できる。

第2-1層：灰白色細粒砂。層厚は25～35cm。ほぼ均一な粒子の砂層である。

第2-2層：シルト～砂～細礫互層。層厚は75～90cm。平行ラミナや一部に斜交ラミナなど、水流に起因する堆積構造が観察できる。落ち込みを充填する、河床構造堆積物のような水成堆積層で、侵食と堆積を順次繰り返しながら埋没していった様子が看取できる。調査地が丘麓であることを考えると、埋没河川などは想定しがたく、背後の山側から雨水によって流出した土砂によって、谷地形が埋没したものであろうか。

第2-3層：灰白色中粒砂。層厚は30～40cm。第2-1層に類似する砂層で、谷状地形のベース層である。



第4図 北壁土層断面図 (V=1/125, H=1/50)

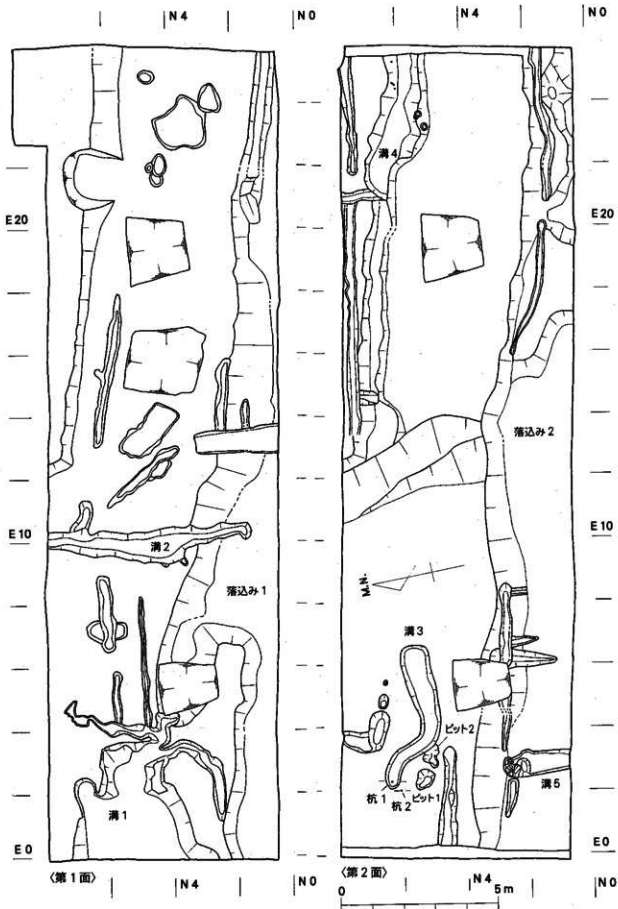
- 第3層：紫灰色砂質シルト。層厚は20～55cm。第1面のベース層である。
- 第4層：東側と西側とで大きく地質が変化するが、第1面溝2に分断されており、両層の対応関係は不明である。第2面のベース層である。
- 第4-1層：暗紫灰色シルト質粘土。層厚は45～60cm。調査区東半部に見られる水平堆積層である。
- 第4-2層：灰白色細粒砂～暗紫灰色シルト質粘土互層。層厚は最大85cm。第3面区画6埋土に相当する。
- 第5層：黒色腐植砂質粘土。層厚は6～10cm以上。第3面のベース層で、水田遺構の床土に相当する。
- 第6層：暗褐色細粒砂～砂質シルト～灰色砂質シルト。層厚は8～16cm。第3面のベース層で、西側に向かって傾斜する。
- 第7層：褐灰色シルト質粘土。層厚は10cm。第3面のベース層で、西側に向かって傾斜する。
- 第8層：黒褐色シルト質粘土～褐色砂質シルト。層厚は15～30cm。第4面のベース層である。
- 第9層：褐色シルト質粘土～暗褐色粘土～暗灰色砂質シルト～暗灰色シルト質粘土へと、微妙に土色や土相が変化する。層厚は10～40cm。第5面のベース層である。主に弥生土器畿内第V様式～布留式土器の土器群包含層を形成する。
- 第10層：黒褐色シルト。層厚は15～20cm以上。第6面相当のベース層である。上層と同様に、畿内第V様式～布留式土器群の包含層を形成する。
- 第11層：褐色シルト質粘土～粘土。層厚は最大10cm。第7面の覆土層である。
- 第12層：灰白色細粒砂。層厚は40～46cm。第7面のベース層である。
- 第13層：黒色～暗灰色シルト質粘土。層厚は15～18cm。第8面ベース層で、水田遺構の床土に相当する。
- 第14層：灰白色中粒砂。層厚は15cm以上。第9面のベース層である。工事予定深度外のため、これより下層の掘削は行っていない。

【引用・参考文献】

- ・小山正忠・竹原秀雄 1987 『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所
- ・町田洋・新井勇夫・森脇広 1986 『地層の知識—第四紀をさぐる—』 東京美術

(2) 検出遺構と遺構出土遺物

今回の発掘調査では、合計9次にわたる遺構面を検出した。出土遺物は二次堆積遺物が多く、すべての遺構面・遺物包含層中から、主に弥生時代後期の弥生土器と古墳時代初頭から前期にかけての古式土器が出土する、複雑な出土状況を呈していた。以下、順を追って各遺構と遺構内出土遺物を記す。



第5図 遺構平面図(1)

a. 第1面(第5図左、第10図、図版1)

第3層(紫灰色砂質シルト)上面において、東西方向に走行する落込みと、これに並走する流路2条・溝9条・土坑3基・ピット5基、それに地震痕跡などを検出した。

落込み1は南に向かって2段の階段状に傾斜し、最大高低差は90cmを測る。溝1は断面U字形の浅い溝で、壁面とセクションベルトの埋土観察から、砂～シルトの平行ラミナによる流水痕が観察でき、侵食谷が堆積と侵食を繰り返していく過程で形成された自然流路である。埋土中から陶器碗(3)など、近世後期の陶磁器が出土した。溝2は検出面の関係で一見小溝状を呈するが、これも壁面観察から、侵食谷の堆積過程で形成された断面V字形の流路と見られる。その他の小溝は概ね東西方向に走向し、一部南北方向に走向する小溝と直交するように重複する。

溝1以外の遺構からは近世の遺物は一切出土せず、主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土し、図化できたものに落込み1から出土した弥生土器手焙形土器(1)や、桶葉型の瓦器碗(2)がある。ただし第1面ベース層以下の層中からも近世の遺物が出土しており、よって溝1以外の遺構出土物はすべて二次堆積遺物と判断した。また時期は不明であるが、溝2から硯が出土した。したがって第1面の時期は江戸時代中・後期(18世紀後半～19世紀初頭)と考えられる。

・地震痕跡(第6図、図版10上段)

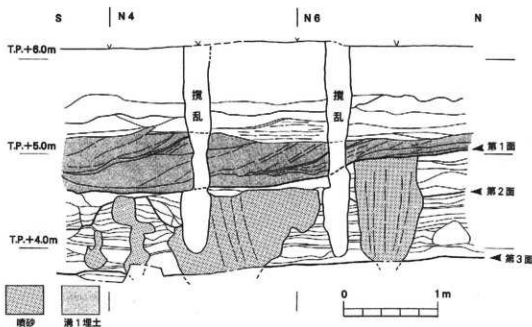
地震痕跡は調査区西端と西壁断面において、地震の際に発生した液状化現象による噴砂の通り道である砂脈が観察された。砂脈は溝1と重複していた関係もあって、検出段階ではその存在に気付かず、第2面以下まで掘り下げた下層の掘削段階で確認された。そのため平面図化は行っていないが、図版11上段右の作業風景で、地面に見える白い帯状の部分が発見された。砂脈は北西～南東方向に走向し、噴砂は堆積層を突き破り、第3層を貫いて第1面上面にまで吹き上がり、第2層に覆われる。

砂脈は細礫～極粗粒砂で充填され、大きいものには縦方向のラミナが認められる。噴砂の供給元は、工事深度の関係で未掘のため不明である。西壁断面の観察では、大型2本と小型2本の計4本が見られ、幅は大型のうち向かって右側が67cm、左側が118cm以上を測る。いずれの噴砂も、第3面よりも下層の砂層から、少なくとも110cmほど吹き上がる。

b. 第2面(第5図右、第10図、図版2)

第4-1層(暗紫灰色シルト質粘土)および第4-2層(灰白色細粒砂～暗紫灰色シルト質粘土互層)上面において、東西方向に走行する落込みと、それに並走する小溝14条・ピット5基・木杭2本などを検出した。

落込み2は南と西に向かって緩く傾斜し、最大高低差は80cmを測る。小溝は第1面と同様に、主に東西方向に走向し、一部南北方向の小溝と交差して重複する。木杭はいずれも、樹皮を残し枝を払っただけの自然木の先端を尖らせたもので、杭1は残存長64cm、径7cm、杭2は



第6図 西壁断面に現れた噴砂

残存長70cm、径7cmを測る。

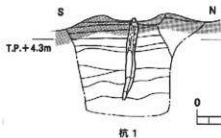
この遺構面も弥生土器や古式土師器の出土が多いが、ピット1から近世の土製玩具船(6)、溝3から近世の土師器灯明皿(5)、溝4・5・落込み2から14世紀後半～15世紀の土師器小皿(4)、溝5から近世の燻し瓦、ピット2から中国・北宋代の銭貨「康定元寶」(206)・「政口口寶(政和通寶か?)」(207)、落込み2からサヌカイト製スクレイパー(211)などが出土している。

遺構面の時期は、おおよそ江戸時代中・後期(18世紀以降)と考えられる。

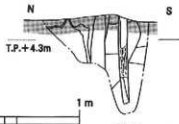
c. 第3面(第8図左、第10図、図版3)

調査区西端の第5層(黒色腐植砂質粘土)と、中央部の第6層(暗褐色細粒砂～シルト～灰色砂質シルト)、および東端の第7層(褐色シルト質粘土)の各上面において、水田区画6筆と、これに伴う畦畔・水口・人間の足跡群、それにピット1基などを検出した。

水田区画は基盤目状の区画ではなく、何れも平面形が不定形で、畦畔に方位の規格性は感じられない。水田区画の底面はほぼ平坦面を成し、各区画の中央部における標高は、区画1が3.55



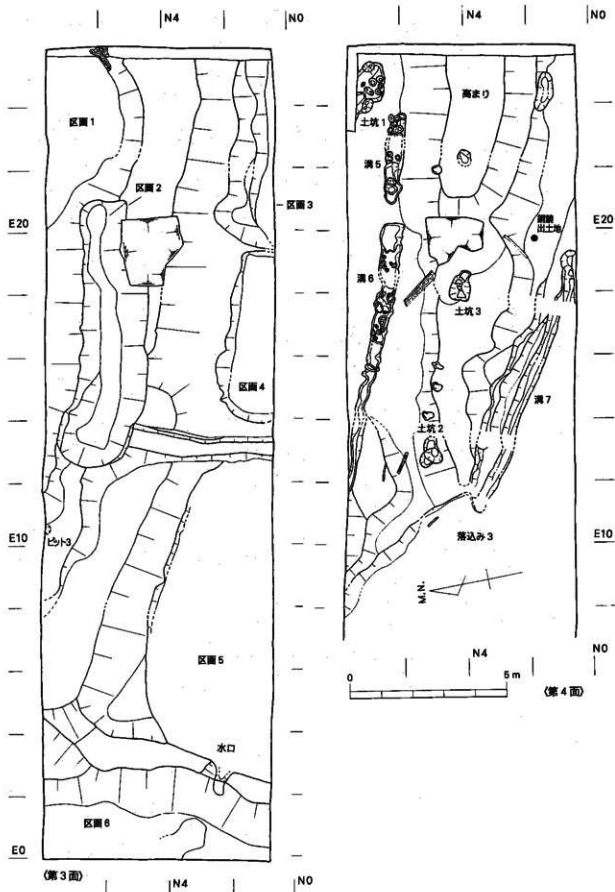
坑1



坑2

第7図 第2面木杭立面図

m、区画2が4.50m前後、区画3が4.10m、区画4が4.11m、区画6が3.80mを測り、区画5は未掘のため不明である。区画5と区画6とを分ける畦畔には、幅8cmの水口と思われる切れ目が存在する。なお未図化である



第8図 遺構平面図(2)

が、区画4と区画5の耕土面上に、人間のものと思われる足跡が多数認められた(図版3の白い斑状の箇所)。足跡の歩いた方向性は特に認められず、不定方向に何度も往復しているようである。

前段階と同様に、この遺構面でも弥生土器や古式土師器の出土が多いが、区画6から弥生土器甕(9)・鉢(10)・陶器摺鉢(11)、水田区画5から弥生土器水差し形土器(7)、平安時代中期の土師器坏(12)・区画4から平安時代末～鎌倉時代の土師器小皿(13)、区画2から古式土師器小型丸底壺(8)などが出土した。ピット3は正確な平面形は不明であるが、北壁土層断面部分において径30cm、深さ45cmを測る。埋土中から銭貨「口豊通口(元豊通實か?)」(208)が出土している。

遺跡面の時期は、平安時代後半～鎌倉時代(11～13世紀代)と考えられる。

d.第4面(第8図右、第10図、図版4)

調査区西端部は工事深度の関係で未掘であるが、第8層(黒褐色シルト質粘土～褐色砂質シルト)上面において、東西方向に走行する落込みと、それに並走する極低く細長い高まりと、小溝3条・土坑2基・ピット7基などを検出した。

落込み3は南西方向に緩く傾斜し、工事深度の関係で完掘はしていないが、検出段階で最大高低差は58cmを測る。埋土から、弥生土器・古式土師器などの土器が多量に出土したほか、須恵器甕・坏高台部、土師器小皿(いわゆる「ての字状口縁皿」)がわずかに混じる。その中でも特筆すべき遺物として、銅鏡片(204)がある。銅鏡は破碎された破片で、落込み底面から6cmほど浮いた位置で出土した。

高まりは北側の丘陵とほぼ平行に延びており、方位はN63°Wを示し、南側へ低くなり、基底幅4.3m、上端幅1.7m、高さは検出段階で最高19cmを測るが、本来はもう少し高かった可能性がある。高まりは、その南北両側では高さが異なっていた。南側の落込み部分は徐々に深くなるのに対して、北側の方は最も高い中央部分から少し低くなった所で平坦な面になり、落込み3側の方が低くなる位置関係にある。

溝5・6は、高まりの裾部内側を並走し、途中土橋状の箇所で分断される。幅30～70cm、最深部で溝5が20cm、溝6が13cmを測る。溝の断面形は箱形で、部分的にオーバーハング状を呈し、底部は凹凸が著しい。埋土は軟質の砂にシルトブロックや粘土ブロックが入り、一気に埋め戻された様子で、ラミナなどの流水痕は見られない。

土坑2は東西85cm×南北70cm、深さ51cmの不定形な小土坑である。埋土から二次焼成を受けて黒褐色の金属状附着物が残る土師器椀(202・203)、奈良時代の須恵器坏身・製塩土器(14)・土師器小型丸底壺(15)が出土している。

上記以外では、いずれも小片のため未図化であるが、土坑3と溝7からは弥生土器や古式土師器に混じって、古墳・奈良時代の須恵器坏などが出土している。その他の遺構からは、古式土師器などが出土している。

第4面の時期は主に古墳時代前期とみられるが、奈良～平安時代後半の遺物を含む遺構も認

められることから、同一遺構面に時期の異なる遺構が重複しているものと判断される。

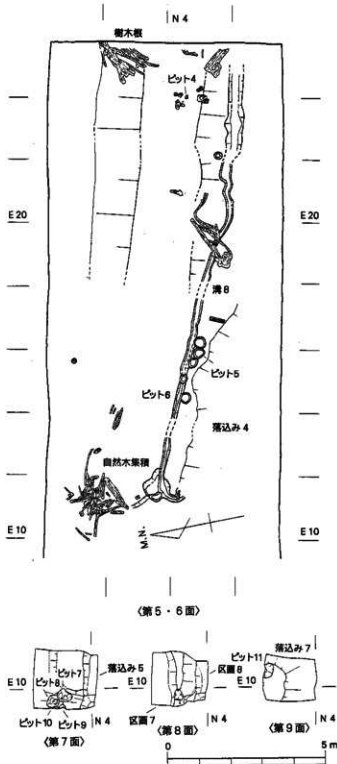
e. 第5面(第9図上段、第10・16図、図版5)

第9層(褐色シルト質粘土～褐色粘土～暗褐色粘土～暗灰色砂質シルト～暗灰色シルト質粘土)上面において、東西方向に走向する落込みと小溝1条・土坑1基・ピット14基などを検出した。落込み4は未掘のため高低差は不明である。溝8は東西に走向する、全長13.9m以上、幅25cm、深さは最深部で13cmの小溝である。溝内からは古式土師器の小破片が多く出土している。この小溝に沿うような位置に、ピットが点在する。

調査区東端では、8基の小ピットが隣接しあって見られた。このうちピット4は平面形が蹄状を呈することから、動物の足跡と考えられる。その他は平面・断面形とも不定形で、樹木の根痕と思われる。また樹木根が調査区東端で、自然木の集積が調査区の中央部で見られた。

ピット5は東西32cm×南北32cm、深さ15.5cmの不定形な小型の土坑で、埋土から古式土師器高坏(16)が出土している。またピット6は東西26cm、南北23cm、深さ22cmを測る。前述のピット5と合わせて、坏部内面に朱が付着した土師器高坏が出土している。

遺構面直上からは、弥生土器壺(124)・甕(125・127)、古式土師器壺(126・128)・甕(129・133)・高坏(130)・小型丸底壺(131)・製塩土器(132)などが出土した。遺構面の時期は、古墳時代前期(3世紀後半～4世紀代)でも後半と考えられる(註1)。



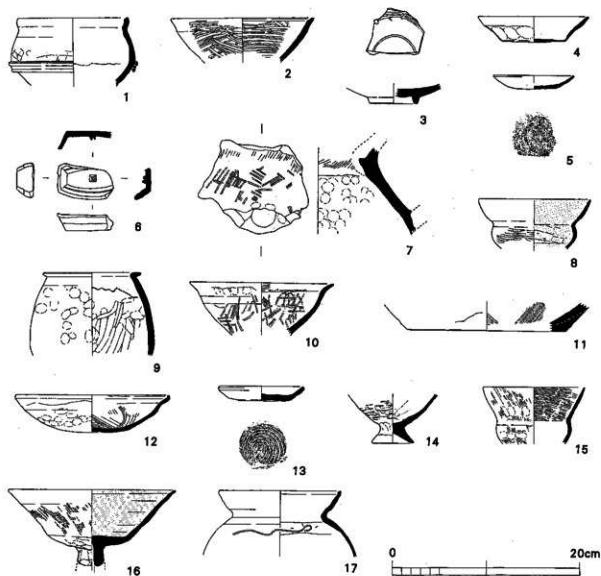
第9図 遺構平面図(3)

f.第6面(第17・18図、図版6・7)

遺構は検出されていないが、第10層(黒褐色シルト)上面から弥生土器や古式土師器などの多数の遺物が出土したため、調査段階で遺構面と同等に扱った。

弥生土器は吉備系甕(134)・有孔鉢(135)、大型把手付き鉢(136)、壺(137)、細頸壺(139)等があり、特筆すべきものとして坏部内面に朱が付着する高坏(138)などが出土した。

古式土師器は甕(140・141・143)・壺(142・146・151~154)・高坏(145)・台付き鉢(147)・小型丸底壺(148・150)等があり、特筆すべきものとして、底部を穿孔し口縁内面と体部に黒〜銅色の金属状付着物が残る土師器小型丸底壺(149)が出土している。表面の一部は炭化しており、



1・2：第1面 落込み1 3：第1面 溝1 4：第2面 落込み2 5：第2面 溝3 6：第2面 ビット1
7：3面 区画5 8：第3面 区画2 9~11：第3面 区画6 12：第3面 区画5 13：第3面 区画4
14・15：第4面 土坑2 16：第5面 ビット5 17：第7面 落込み5

第10図 遺構出土遺物

※图中網掛け箇所は朱付着

3箇所に穿孔して、そのうち2箇所は未貫通である。

遺構面の時期は、古墳時代前期後半と考えられる。

g. 第7面(第9図下段左、図版8上段)

第7面以下は、グリッド部において検出したものである。第7面では第12層(灰白色細粒砂)上面において、東西方向の落込みと、ピット5基を検出した。

落込み5は南側ほど深く、検出部分で高低差は24cmを測る。埋土中より、体部に緩い曲線状の篆刻を施した布留式甕(17)が出土した。

ピット群は一箇所に隣接しあい重複した状態で検出され、そのうち完掘できたものは、ピット7が長径49cm、深さ15cm、ピット8が長径46cm以上、深さ28cm、ピット9が深さ12cm、ピット10が深さ17cmを測る。いずれも平面形・断面形とも不定形で、樹木の根の痕跡などの可能性が考えられる。第7面の遺構の時期は、古墳時代前期前半と考えられる。

h. 第8面(第9図下段中央、図版8中段)

第13層(黒色～暗灰色シルト質粘土)上面において、東西方向の水田畦畔と考えられる高まりを検出した。

畦畔は基底幅85cm前後、上端幅20～40cm、高さは最高所で18cmを測る。水田区画の底面の標高は、区画7が3.61m、区画8が3.35mである。両方の水田区画埋土から、古式土師器小型器台・壺・甕などが出土した。いずれも小片のため時期を特定しがたいが、第8面の遺構の時期は、おおむね古墳時代初頭もしくは前期(3～4世紀代)と考えられる。

i. 第9面(第9図下段右、図版8下段)

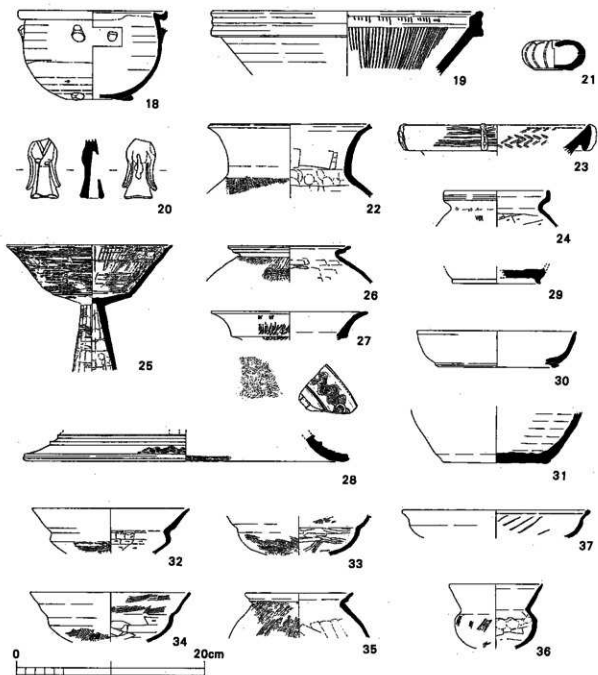
第14層(灰白色中粒砂)上面において、南から東へ傾斜する落込みと、ピット1基を検出した。

落込み7は工事深度の関係で未掘である。ピット11は径45cm、深さ50cmの断面台形のしっかりしたもので、建物の柱穴の可能性も考えられる。ピット埋土から、弥生土器もしくは古式土師器の細片が、僅かに1点のみ出土した。第9面の遺構の時期は、弥生時代もしくは古墳時代初頭頃と考えられるが、時期を特定することはできなかった。

(3) 遺物包含層出土の遺物

発掘調査では、遺構埋土および各遺物包含層中から、コンテナ箱約120箱におよぶ遺物が出土した。出土点数は遺構中よりも、遺物包含層中からのものが圧倒的に多かった。とりわけ、黒っぽい色の土壌化層中からの出土品が、点数的にも多く、なおかつ残存状況の良好なもの多い傾向が見られた。

その内訳は、弥生時代前期から江戸時代にかけての土器・陶磁器・石器・青銅器・木器などの多岐にわたった。



18～19：第2層 20：第4層-1層 21：第4～2層 22：第5層 23～31：第6層 32～37：第7層

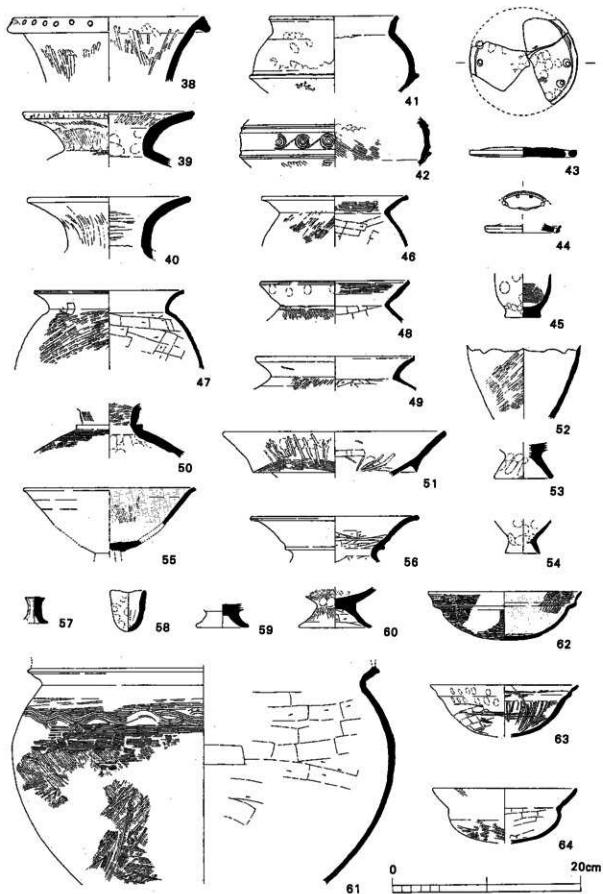
第11図 第2～7層出土遺物

※図中網掛け箇所は朱付着

以下では図化できた遺物及び、下限年代を示す遺物を中心に記述する。

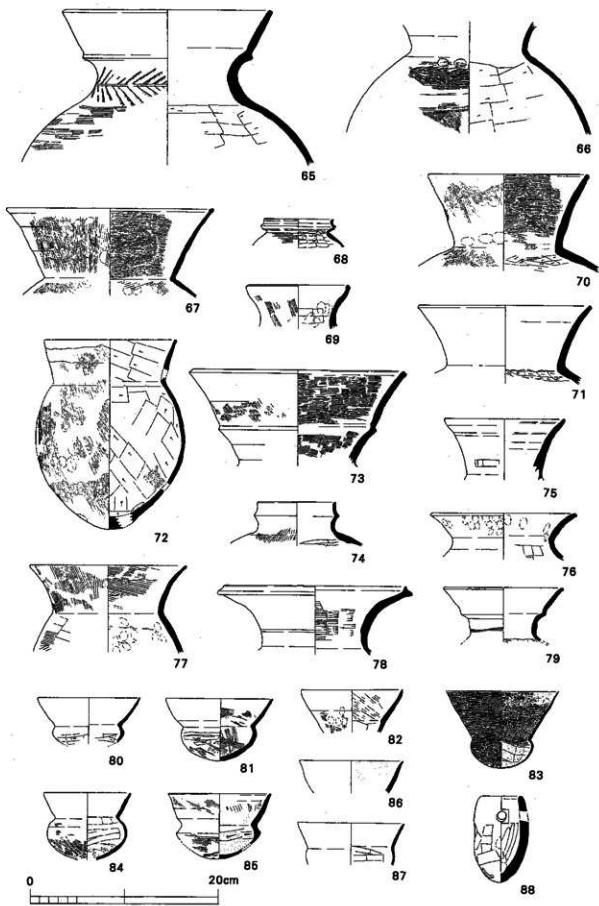
〔第2層出土遺物〕(第11図)

舞子・明石焼と考えられる陶器土鍋(18)、埴焼もしくは明石焼播鉢(19)などが出土した。遺物の下限年代は江戸時代中・後期(18世紀後半～19世紀初頭)である。



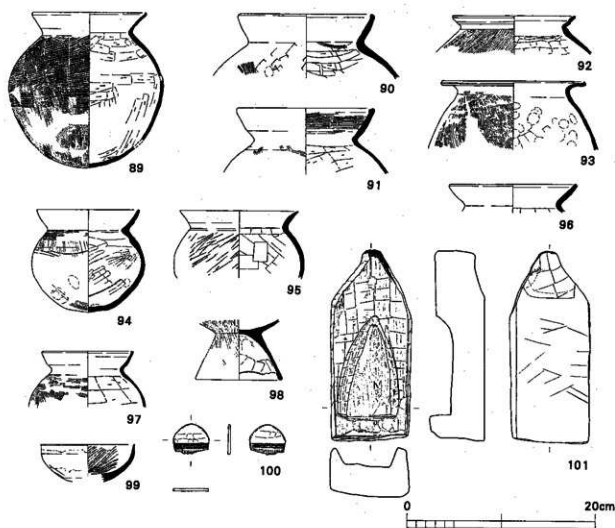
第12图 第8層出土遺物(1)

※图中網掛け箇所は朱付着



第13图 第8層出土遺物(2)

※图中黑掛け箇所は朱付着



第14図 第8層出土遺物(3)

〔第3層出土遺物〕(第11図)

陶質土器壺、備前焼摺鉢、瓦質土器羽釜、土師器三足鍋、石錐(210)などの他、特筆すべき遺物として鋳型状土製品(201)が出土した。鋳型状土製品は、全体に高熱を受けて硬質化してにぶい黄橙色を呈し、部分的に灰白色、黒色、黄灰色に変色しており、表面には銅の溶解物質が付着している(註2)。

図化可能な遺物は二次堆積遺物のみのため、時期を特定しがたいが、上下の層位関係から考えて、土層の年代は江戸時代であることは確実である。

〔第4層出土遺物〕(第11図)

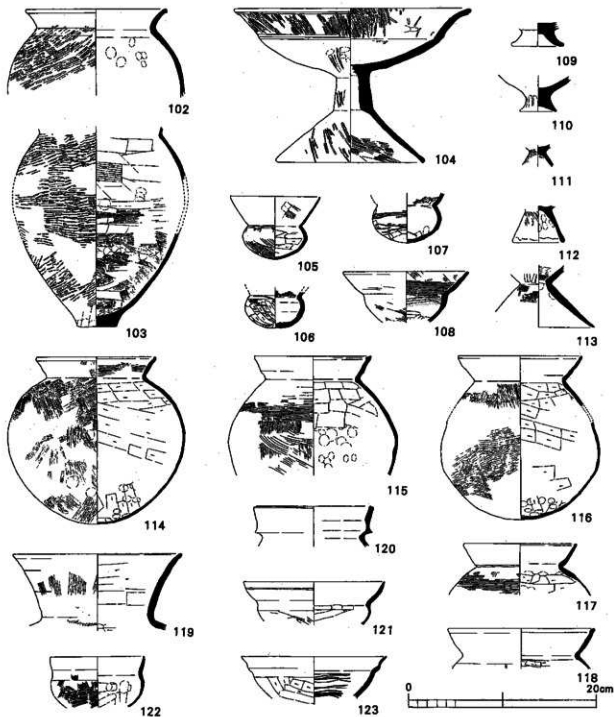
土製玩具土人形(20)・軟質陶器玩具南瓜(21)、石器スクレイパー(214)、銭貨「元豊通寶」(209)などが出土した。遺物の下限年代はおおよそ江戸時代中・後期(18～19世紀)である。

〔第5層出土遺物〕(第11図)

古式土師器壺(217)、陶質土器広口壺(22)などが出土した。図化可能な遺物は二次堆積遺物のみのため、土層の年代の特定はできない。

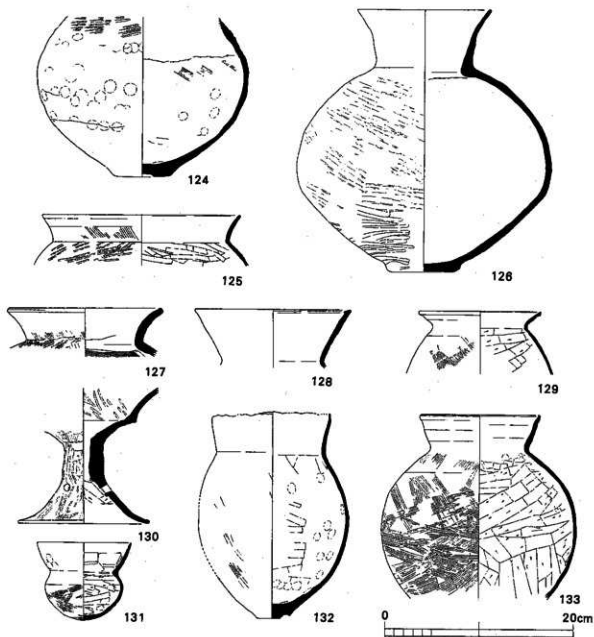
〔第6層出土遺物〕(第11図)

弥生土器壺(23・27)・高坏、古式土師器高坏(25)・甕(24・26)、韓式系軟質土器、陶質土器も



第15図 第9層出土遺物

※图中網掛け箇所は朱付着



第16図 第5面土器群

しくは初期須恵器高坏形器台(28)、須恵器坏身(29・30)・坏蓋・壺(31)・甕・台付き坏・細頸壺、黒色土器A類碗・同B類碗、サヌカイト石核(212)などが出土した。遺物の下限年代は平安時代(11世紀代)である。

〔第7層出土遺物〕(第11図)

古式土師器浅鉢(32~34)、S字状口縁甕(35)・小型丸底壺(36)、須恵器坏身、土師器坏(37)などが出土した。遺物の下限年代は奈良時代(8世紀代)であるが、第4面遺構の年代から逆算すると、これらも二次堆積遺物であろう。

【第8層出土遺物】(第12~14図)

弥生土器壺(38~40・42)・手焙形土器(41)・蓋(43・44)・高坏・甕・ミニチュア土器壺(45)、
古式土師器・有段浅鉢(62~64)・小型丸底壺(80~87)・ミニチュア土器高坏(57)・鉢(58)・製塩
土器(52~54)・蛸壺(88)・台付き鉢(59・60)・S字状口縁台付き甕(92・98)・壺(65~79)・甕(46~
49・89~91・93~97)、鼓型器台(56)・大型鉢(61)、土師器碗形鉢(99)、須恵器坏の高台部、木器
櫛(100)・板状木製品(155)・船形木製品もしくは船形容器(101)、石製投弾がある。この内で特筆
すべきものとして、内面に朱が付着した小型丸底壺(83・85・86)・高坏(55)・有段浅鉢(52)がある。

木器櫛(100)は、一枚板から削りだした刻歯式の櫛であるが、外観は結歯式の縦櫛をモチーフ
にしており、横木を再現した“痕跡器官”が見られる。船形木製品、もしくは船形容器(101)
は、全長20.3cm、全幅8.5cm、全高5.8cmを測り、直方体の角材を利用して、船首を裁断し尖ら
せて、船と平底を表現する立体船形である。内部は平面形が曲線的な二等辺三角形形状に割り貫
き、外観よりも丁寧な加工を施す。あるいは未完成品とも考えられる。

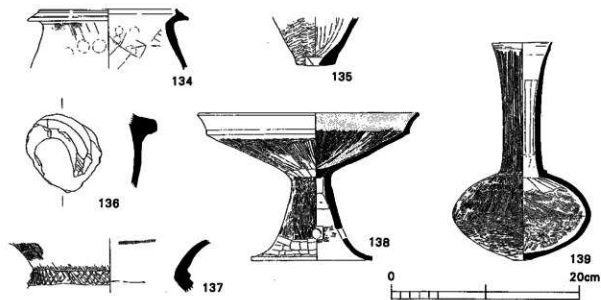
遺物の年代は一部に混入と思われるものを含むが、おおむね古墳時代前期である。

【第9層出土遺物】(第15図)

弥生土器甕(102・103)・高坏(104)・壺、古式土師器小型丸底壺(105~107)・台付き鉢(109)、
製塩土器(110)・小型器台(113)・甕(114~118・120・216)・台付き甕(111・112)・壺(119)、浅鉢
(121・123)、小型鉢(122)、特筆すべきものに内面に朱が付着した小型丸底壺(108)が出土した。
遺物の下限年代は古墳時代前期である。

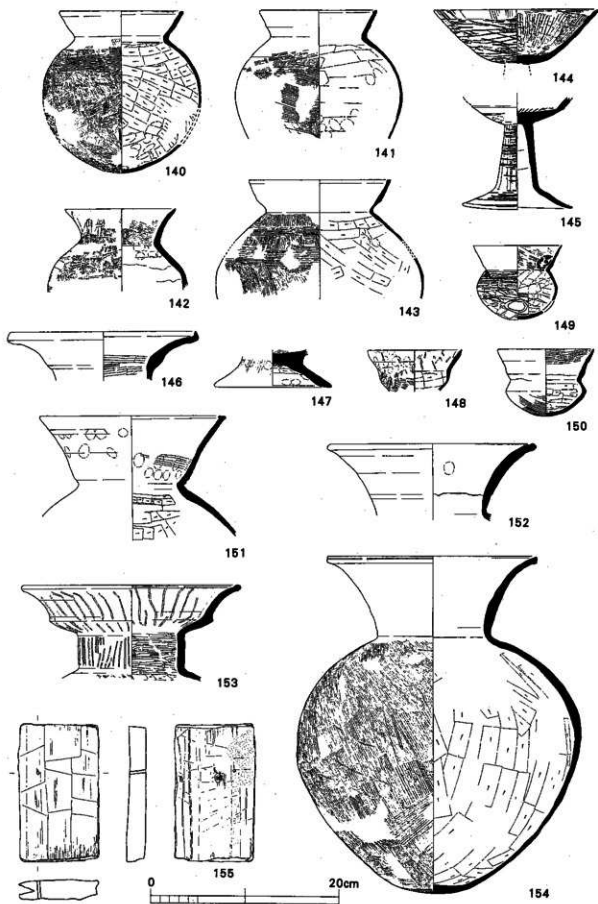
【第10層出土遺物】(第19図)

弥生土器深鉢(156)・鉢(157)・ミニチュア土器鉢(158)・高坏(159)、長頸壺(160)、甕(161)、

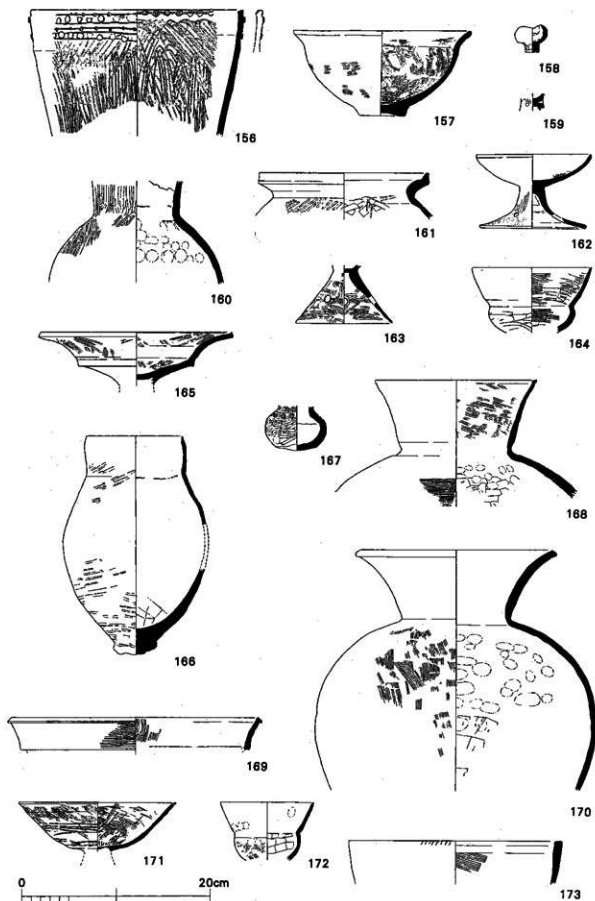


第17図 第6面土器群(1)

※図中網掛け箇所は朱付着



第18图 第6面土器群(2)



第19図 第10~13層出土遺物 156~164: 第10層 165~172: 第11層 173: 第13層

古式土師器小型丸底壺(164)・高坏(162)・小型器台(163)、銅鍔(205)、石鍔(213)、サヌカイト原石(215)、板状加工木材(図版7下段右)などが出土した。

弥生土器深鉢は、口縁部外面に5条のヘラ描き沈線を巡らし、口縁部外面と内面端面近くに円形浮紋を飾り、体部は内外面ともに磨きを施す。文様構成から弥生時代前期、胎土より生駒山西麓産と思われるが、あまり類例を見ないタイプの土器である。

銅鍔は全長4.8cmを測る、「↑」状を呈する鋭角な形状の有茎式鍔である。現在なお鮮やかな赤銅色を保っているが、表面の一部に黒色の物質が付着している。

遺物の下限年代は古墳時代前期である。

[第11層出土遺物] (第19図)

弥生土器高杯(169)、古式土師器小型壺(167)・高坏(165・171)・製塩土器(166)・壺(168・170)・小型丸底壺(172)などが出土した。遺物の下限年代は古墳時代前期である。

[第12層出土遺物]

図化できる遺物はなく、弥生土器の小片が少量出土した。遺物も二次堆積遺物のため、土層の時期の特定はできない。

[第13層出土遺物] (第19図)

弥生土器鉢(173)・壺などが出土した。遺物の年代観は、弥生時代中期後半(B.C.2~1世紀)である。

[出土層位不明遺物] (第20図)

弥生土器広口壺(174)、古式土師器小型丸底壺(175)、土師器「ての字状口縁皿」(176)などが北壁断面の清掃時に出土した。



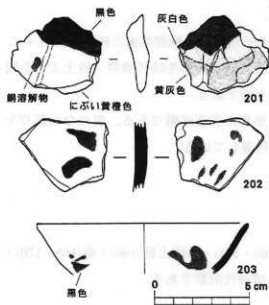
第20図 出土層位不明遺物

[註]

- 1) 弥生時代中期後半～古墳時代前期までの暦年代は、(財)大阪府文化財センターの土器実年代案に準じた【大文セ2003】。
- 2) 柏原市教育委員会北野重氏より、本土製品は鋳型の可能性があり、表面の付着物は銅であるとのご教示を得た。

[引用・参考文献]

・安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」【考古学雑誌】第60巻第2号 日本考古学協会



201: 第3層 202・203: 第4層土坑2

第21図 鋳造関連遺物

・稲原昭喜ほか2005 「明石焼について」『明石焼と兵庫のやきもの〜古窯から現代陶工までの名品展〜』

明石市立文化博物館

・岡田章一2004 「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡Ⅱ 兵庫県教育委員会』

・(財)大阪府文化財センター編2003 『古墳出現期の土師器と実年代』(シンポジウム資料集)

・高橋一夫1998 『手焙形土器の研究』六一書房

・田辺昭三1981 『須恵器大成』角川書店

・中世土器研究会編1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真腸社

・原田昌則1993 「久宝寺遺跡第1次調査」『八尾市文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会

・平井和2001 「徳川氏大坂城期における土製玩具の

三様相」『研究紀要』第4号 (財)大阪府文化財協会

・森岡秀人2001 「庄内式土器の実年代について」

『3・4世紀日韓土器の諸問題』(国際学術会議資料集)釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会

・森田克行1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

・米田敏幸1994 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ 庄内式土器研究会

・劉巨成編1989 『中国古銭譜』(中国文) 国家文物局編纂組・文物出版社

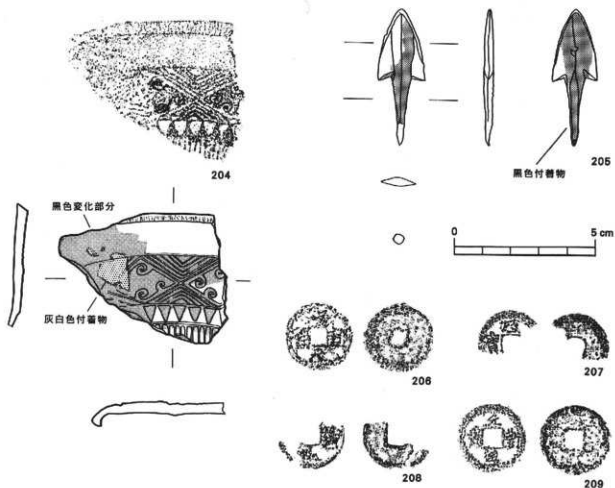
第四章 まとめ

(1) 検出遺構について

今回の発掘調査では、弥生時代後期もしくは古墳時代初頭から近世にかけての、合計9次にわたる遺構面を検出した。各遺構面において、落込み・溝・土坑・ピットなど多岐にわたる遺構を検出したが、検出遺構の性格を明確にしえたものは少なかった。なお、これらの遺構はいずれも約60°前後西へ振った方位を示しており、当地北側に広がる千里丘陵の地形の影響が考えられる。

第1面と第2面には、東西方向と、一部これに直交する南北方向の索掘り小溝群が落込みの屑に並走する位置に認められた。これらの遺構は江戸時代の耕作活動によって残された耕作溝と思われる。

第3面と第8面から、それぞれ平安時代後半～鎌倉時代と古墳時代前期の、水田区画・畦畔・足跡群などを検出した。調査地点は全般的に浸透性の高い砂質の地質であるが、両遺構面は共に黒色粘土層をベースとしている。この粘土層が耕作活動に伴う人為的な客土か否かを即断することは難しいが、保水性の高い粘土層を水田の床土として利用していることは疑いない。以



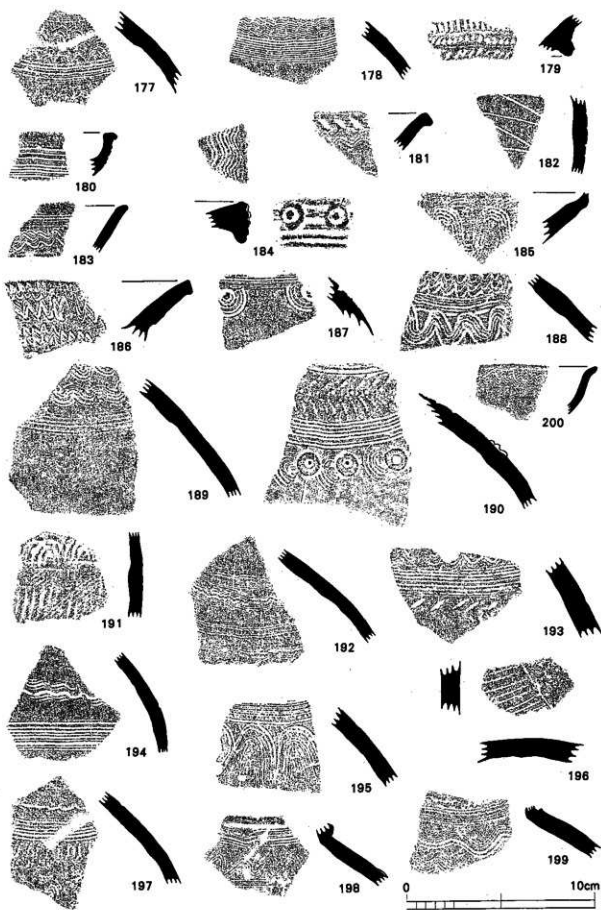
204：第4面 落込み3 205：第10層 206・207：第2面 ビット2 208：第3面 ビット3 209：第4-2層

第22図 銅製品実測図

上のように、中世以降近代に至るまでの間、当地は水田や畠地など耕作地として利用されていたと考えられる。

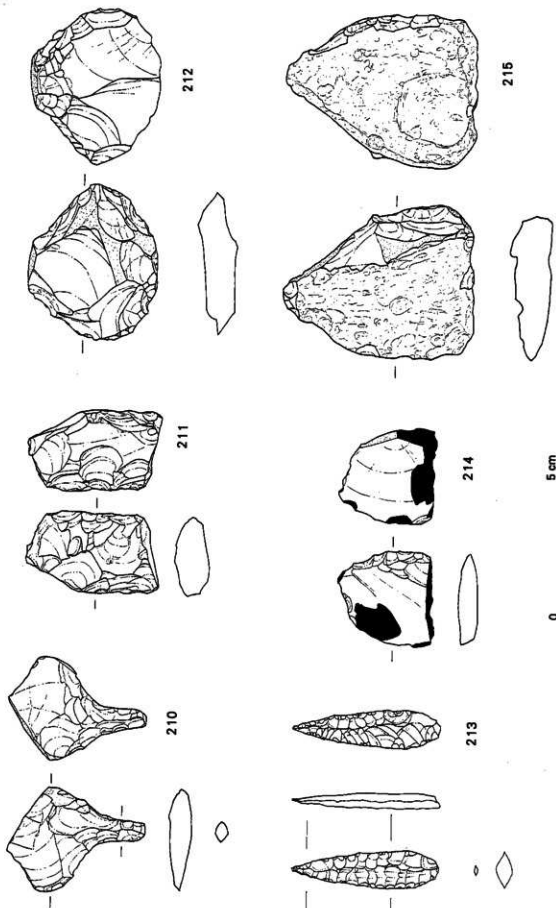
また第1面では、地震の液状化現象による噴砂が、調査区西端において観察できた。この噴砂は18・19世紀の土層を引き裂き、19世紀初頭の遺物包含層でバックされるように覆われており、近世後期に液状化現象を伴う強い地震が発生していたことを物語る。当該期に近畿地方を襲った大地震としては、天保元(1830)年の京都大地震と、安政元(1854)年の近畿地方を広範囲に襲った南海地震が挙げられる。今回検出した噴砂は、これらのいずれかの地震に比定できる可能性がある。

第4面と第5面では、古墳時代集落の存在を想定させる遺物が数多く出土した。第4面では、土坑2から金属状溶解物の付着した土器片や、落込み3からは、溶解途中で廃棄された銅鏡片が出土した。鑄造関連の遺構は見つかっておらず、銅を鑄潰して何を鑄造したのかなどは、現時点では手がかりがなく不明と言わざるをえない。しかし調査地近隣に、銅を溶解する工房の



177~179: 第6層 180: 第7層 181~194: 第8層 195: 第9層 196~197: 第10層 198~199: 第6面 200: 出土層位不明

第 23 图 弥生土器·古式土師器拓本



210:第3層 211:第2重流石分2 212:第6層 213:第10層 214:第4-1層 215:第10層

第24圖 石器実測図

ような施設が存在していた可能性を大いに示唆させるものである。第5面では古墳時代前期の遺構を中心に、遺構面直上とベース層中から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器がまとまって出土した。住居跡などの集落そのものの遺構は、今回は検出されなかったが、調査地が集落の縁辺部であった可能性は高いと思われる。

第8面と第9面については、グリッド部の発掘面積が限られていたため、全容を知ることが困難であった。第8面のピット群は、断面形・平面形とも不定形で、柱穴よりは樹木の根の痕跡の可能性が高いように思われる。第9面ピット11は柱穴の可能性も考えられたが、僅かに1基のみのため、時期も特定しがたく、今次調査では明確な生活遺構と断定することはできず、今後の調査にその可能性を託すこととなった。

ところでこれらに関連して、第2～4層と第8層以下の土層・遺構面において、時期差(土器の型式差)をほとんど見出すことができなかった。前述のとおり、各層中にはほぼ満遍無く後期以降の弥生土器や古式土師器の二次堆積遺物が含まれており、第8層以下の土器群についても、庄内～布留式土器の型式の細分化を試みたが、各層ごとに抽出した遺物の年代観と、層位関係とが逆転しているケースが見られるなど、予想を越えた複雑な堆積状況を呈していた。また整理作業段階においても、2～3層の層位間を越えて接合可能な土器片が多く見受けられた。

以上のような状況から判断すると、当調査地は丘陵背後からの雨水の流入や、地震などに起因する土砂崩落などによって、短期間の内に次々と堆積を繰り返しては、その上面に生活面が形成されていった結果の姿ではないかと考えられる。

(2) 外来系土器について

第9・10層を中心とする各遺物包含層から出土した土器の中には、北摂地域を中心とする在地系土器のほかに、器形や胎土などから、他地域から搬入された外来系土器が認められた。時期はおおむね弥生時代後期から古墳時代中期初頭にわたる。土器の産地と器種の内訳は以下の通りである。

[河内系]

主に現在の大阪府中部で製作されたと考えられる土器である。器形は北摂地域のものと大差ないが、生駒山西麓地域特有のチョコレート色の胎土を特徴とする。弥生土器深鉢(156)・広口壺(174・184)、甕(49・200)があり、これ以外にも未図化のものがある。

[東海系]

主に東海地方で製作されたと考えられる土器である。棒状浮紋や羽状列点紋を持つ広口壺や、口縁部が「S」字状に屈曲する台付き甕を特徴とする。弥生土器広口壺(23)、土師器S字状口縁甕(26・35)とその台部(112・98)、ミニチュア台付き甕(111)などが見られる。

[吉備系]

主に山陽地方で製作されたと考えられる土器である。口縁部が直上に伸びる壺や、連続渦巻紋を特徴とする。弥生土器甕(24・161・134)、直口壺(42)、土師器二重口縁小型壺(68)などが見

られる。

[山陰系]

主に山陰地方で製作されたと考えられる土器である。曲線的に外反する二重口縁、鼓型器台、壺では頸肩部に飾られた櫛状工具による綾杉紋(刺突紋)などを特徴とする。土師器二重口縁壺(65)、壺(66)、二重口縁甕(79・120)、二重口縁大型鉢(61)、鼓型器台(56)などが見られる。鼓型器台は図示したもの以外にも、6片ほどが出土している。

[東四国系]

主に四国東部で製作されたと考えられる土器である。口縁が大きく外反して、端部が三角形を呈する広口壺や、鋭角的な形状の小型丸底壺や浅鉢、口縁調整をしない製塩土器などを特徴とする。土師器有段浅鉢(32)、小型丸底壺(85)、甕(93)、広口壺(78・146)、鉢形製塩土器(52)などが見られる。

[近江系]

主に現在の滋賀県で製作されたと考えられる土器である。櫛描き直線紋・列点紋・竹管紋付き円形浮紋などを特徴とする。弥生土器壺(187・190・197)などが見られる。

[西部瀬戸内系]

主に瀬戸内沿岸の西部で製作されたと考えられる土器である。壺では頸部に巡らした格子状の刻み目突帯(多条沈線)や、一度外反してから内側に狹まる二重口縁を特徴とする。弥生土器壺(137)、土師器二重口縁壺(74)などが見られる。

[韓式系土器・初期須恵器]

朝鮮半島南岸地域で製作された舶載品、あるいはその技法を用い日本国内で製作された土器である。体部に格子目叩きを施したり、ヘラ描き沈線を巡らす、壺や鉢を特徴とする。図化可能なものでは陶質土器広口壺(22)がある。図版21左下の3片は、接合はできないが、形状や色調から同一個体と思われる(実測部分は写真右の破片)。これ以外にも、別個体と思われる陶質土器壺体部片、軟質土器などの図化不可能な細片が数片見られる。

高環形器台(28)は裾広がりの脚裾部に、波状紋と竹管紋の組合せの紋様構成を持ち、長方形の透かしを穿つ。陶質土器、あるいは初期須恵器であれば最古段階に位置付けられるものである(註1)。

さて、以上の外来系土器の供給元であるが、東は近江・東海地方、西は河内・吉備・山陰・東四国・西部瀬戸内の各地域があり、それに朝鮮半島からの渡来人との関わりを示す韓式系土器がある。中でも河内や瀬戸内東部沿岸の土器が顕著である。これらの土器の移動は、瀬戸内海と河内湖間の、当時の人々や文物の交流を彷彿とさせるものである。こうした交流は、陸上交通のほかに水上交通も想定できるが、これを示唆しうる遺物として船形木製品(101)があげられる。

この種の遺物は、港や船などの水運に関わる祭祀遺物だとする意見もあり[吉田・高萩・西村2002]、瀬戸内沿岸地域の外来系土器の出土を考えるうえでも、興味深い遺物といえよう。

(3) 内面水銀朱付着土器について

第3面水田区画2・第5面ピット5・第6面土器群・第7層・第8層・第9層中から、土器の内面に赤色顔料が付着した古式土師器と一部の弥生土器が出土した。土器内面の赤色顔料について、理学的な分析調査を関西大学工学部金属材料研究室の杉本隆史教授に依頼した。X線回折調査の結果、内面の付着物は水銀朱であることが確認された。いわゆる「内面水銀朱付着土器」と呼ばれるもので、図化できたものが9点あり、さらに図化できなかった小片であるが、X線回折調査の可能なものが30点ほどある。

器種と時期の内訳は、弥生時代後期後半(摂津VI様式)の高坏(138)が1点(3%)、その他は布留式期古相を前後する頃の古式土師器に位置付けられるもので、小型浅鉢(33・62など)4点(13%)、小型丸底壺(8・83・85・86・108など)12点(40%)、高坏(16・55など)9点(30%)、甕2点(7%)、その他器種不明2点(7%)などがある。

このうち小型丸底壺(85)は、その鋭角的な形状から東四国系と思われる。高坏(16)は、焼成後に脚部を坏の根元近くから切断し、破断面を二次加工して坏に転用している。いずれの器種も鉢・小型丸底壺・高坏などで、本来は煮沸用の容器ではないが、外面に二次焼成を受けて煤が付着し、内面に色鮮やかな朱が残存する。これは水銀朱精製の際に、朱や砒素などを混ぜた液体を、調合あるいは分配するために、加熱作業を行なった痕跡と考えられる(註2)。

なお、現在考古学的に確認されている辰砂(水銀朱原石)採掘遺跡には、徳島県阿南市の若杉山遺跡と[岡山ほか1997]、三重県勢和村の丸山口水銀採掘坑跡群[小濱・中川・奥野2004]の2遺跡がある。しかし前述のとおり、東四国系土器の出土が見られ、朱付着土器の一つにも同地域の小型浅鉢が含まれることから、徳島県地方からの水銀朱原材料の搬入と、それに伴う人々の往来を示唆させる。

(4) 破砕された銅鏡について

第4面落込み3の埋土中から、吹田市内で初めてとなる、古墳時代の銅鏡片(204)が出土した。銅鏡は外縁・外区部の破片で、残存部分で6cm×4.5cm、厚さ0.35cm、重量52.5gで、復元径は27.8cmを測る大型鏡である。図面向かって左端が人為的に割られた後に、高熱を受けて溶ける途上の状態で、右端の破断面は人為的に割られた跡がある。

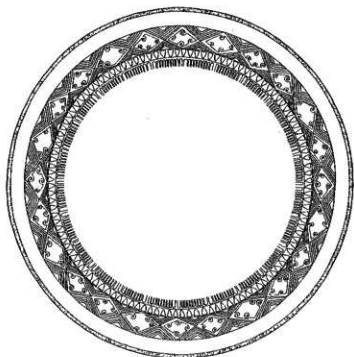
・溶解痕跡について

最も注目すべき特徴は熱を受けた痕跡があることであり、そこは湾曲が著しいうえに表面に黒色の付着物が残存して、船状に曲がっている。この熱を受けた痕跡があることについては、前述と同様に、杉本隆史教授にX線回折調査をお願いした。X線回折調査の結果、800℃程度の高温度で加熱された時にできる酸化銅が検出されたこと、形態が軟化し、鏡の破面には破砕した時にできる面と溶解した時にできる面を共有していることなどから、この鏡は破砕され、溶解された途上の鏡と考えてよいのではないかという所見を頂いた。すなわち鏡を割りルツボに入れて溶解する途中、何らかの理由で中断された状態とみられる。また付着物に酸化ケイ素が

含まれており、鋳潰すのに用いたルツボの一部の可能性がある。なお、鏡が破碎され、高熱が加えられたとみられる時期は、出土遺構である落ち込み3に奈良・平安時代の土器片がわずかに認められ疑問が残るが、遺物のほとんどが古墳時代前期のものであることなど出土状況からみて、古墳時代に当てるのが妥当と判断される。

・型式について

鏡の外縁は幅広い平縁である。外区は外側から菱雲紋・鋸歯紋・櫛歯紋の順に紋様がある。菱雲紋は接続する菱形が作られ、その間には外側に5本、内側に



第25図 仿製鏡復元図 (S=1/3)

4本の山形紋が施される。菱雲紋にはそれぞれ4個の渦紋が付けられ、菱形の総数は24個に復元できる。鋸歯紋は菱雲紋の対角頂部に併せて5個の単位が設けられたようである。鋸歯紋は通常のものよりやや紋様単位が幅広い。菱雲紋は古墳時代の仿製鏡特有の描き方がなされており、大型鏡であることを考え併せると、古墳時代の仿製鏡とみられる [小林1965]。

鏡の種類については、内区が遺存していないので断定できないが、外区に残る紋様からおよその推定が可能である。鋸歯紋・櫛歯紋は古墳時代の鏡の紋様としては用例が多く特徴的なものではないが、菱雲紋・鋸歯紋・櫛歯紋の順に並ぶ紋様の組合せ類例は少なく、管見では豊中大塚古墳(大阪府豊中市)の第2主体部東櫛出土の鏡など [柳本1987]、12例を数えるのみである(註3)。それらのほとんどが方格規矩鏡であるので、垂水遺跡出土鏡も方格規矩鏡と考えられる。では方格規矩鏡の変遷の中でどのような位置にあるのか。ここで再び菱雲紋に着目すると、垂水遺跡出土鏡は接続する菱形に渦紋が4個あり、これに対応する内区図像は直模式・JBI・II式などの獣像が比較的姿を留めるタイプのもと考えられ、4世紀代でも古い様相を持つと言える [田中1983]。

以上、垂水遺跡出土鏡についてまとめると、市内で初出土となる古墳時代前期の大型の仿製鏡で、方格規矩鏡の一部とみられ、4世紀の中でも古い時期のものと考えられる。理学的な分析から、破碎され溶解途上の鏡であって、古墳時代の鑄造関係資料とみられることなど極めて重要な成果が得られた。また、近隣に古墳時代前期の溶解施設があった可能性を示す非常に珍しい資料でもある。この施設で新たな鏡が鑄出されたのか、あるいは他の銅製品が鑄出された

のかは不明だが、古墳時代前期の鏡の製造を含めて、当時の鑄造実態がほとんど解明されていないだけに、今回の発見はその実態に一步迫ったとも言え、大きな成果であった。

5) 総括

これまで、弥生時代中期から後期にかけて、相当大きな集落を形成していたと推定される垂水遺跡は、古墳時代に入ると遺構・遺物ともに減少することから、明らかに衰退し、代わって低地部の垂水南遺跡・五反島遺跡・蔵人遺跡などがその後に発展すると見られていた。しかし、今回行なわれた第24次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が検出されており、弥生時代に成立した集落が古墳時代前期までで続いていたことが明らかとなった。その後、沖積作用による海岸線の後退とともに、さらに引き続き南の低地の垂水南遺跡へと展開していったと見られる。垂水遺跡の立地は、対岸には大阪市の上町台地とその先端部に延びる天満砂堆が間近に迫っており、瀬戸内海から大阪湾を経て河内湖へと通ずる交通の要路に位置していたものと考えられる。

また外来系土器・溶解途中の銅鏡や鑄型状土製品・内面水銀朱付着土器、それに船形木製品などの特殊遺物の有り様は、当地が弥生時代以降も古墳時代前期頃にかけて隆盛し、交易の拠点として栄えて、水銀朱生産や鑄造に関連・従事した集落であったと考えられる(註4)。ただし古墳時代中期の土器は、二次堆積遺物として、韓式系土器や初期須恵器が少量出土しているのみで、古墳時代中期には集落が急速に衰退していったものと思われる。

なお、垂水遺跡とその周辺の遺跡では、弥生時代から古墳時代前期にかけて多くの集落が発展したにも関わらず、明確な墓はほとんど確認されていない。昭和49(1974)年には垂水遺跡北方の千里山西3丁目の造成地で、古墳の石室と考えられる赤色顔料が塗布された石材83点が発見されて、丘陵上に前期古墳の存在が推測されるに至り「垂水西原古墳」と命名された。垂水地域における古墳時代前期の古墳祭祀と朱の実態を考える上で、注目すべき古墳と考えられる。

【註】

- 1) 本品はいわゆる「桶見式土器」であるといえる。なお桶見式土器は、古新羅地域(現在の韓民国慶尚北道慶州市付近)からの舶載品であるとする説と、窯跡は未発見ながら、和歌山県紀ノ川流域で焼かれた初期須恵器だとする説とがあり、現在では後者の説が優勢になりつつある。
- 2) 我が国の弥生時代以降における施朱の風習は、古代中国の神仙思想に基づき、仙薬(飲むと不老不死の仙人になるという霊薬)の調合・製造が行なわれたとされ、弥生時代後期以降に拡大し、古墳時代前期の古墳祭祀と結びつき、葬送儀礼の呪術行為として普及したとされる【大久保1998、北条1998】。
- 3) 菱雲紋・鋸歯紋・樹菌紋の順で並ぶ紋様構成を持つ方格規矩鏡は、全国での出土例に以下のものがある。

大阪府豊中市の豊中大塚古墳(径 18.1cm・5世紀代)、豊中市の南天平塚古墳(径 21.0cm)、京都市の百々池古墳(径 22.7cm)、京都市の稻荷藤原古墳 2 面(径 25.9cm・径 23.7cm)、京都府相楽郡山城町の平尾城山古墳(径 16.7cm・4世紀代)、京都府長岡京市近郊出土(径 15.0cm)、奈良県天理市出土(径 17.8cm)、福岡県宗像市の沖

の島沖津宮祭祀遺跡(径 17.8cm)、静岡市の三池平古墳(径 19.5cm・4世紀後半)、埼玉県児玉郡美里町の長坂聖天塚古墳(径 22.5cm・5世紀前半)。

- 4) 合田幸美氏によれば、流通拠点集落の共通項として、外来系土器・金属器(銅剣・仿製鏡など)・朱や朱を精製した遺物・希少遺物を挙げる〔合田 2000〕。

【引用・参考文献】

- ・合田幸美 2000 「溝作遺跡出土の外来系土器について」『溝作遺跡』(その1・2) (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・市毛勲 1998 『朱の考古学』 雄山閣
- ・大久保徹也 1998 「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社
- ・岡山真知子ほか 1997 「辰砂生産遺跡の調査-徳島県阿南市若杉山遺跡-」 徳島県立博物館
- ・小濱学・中川明・奥野実 2004 「勢和村水銀探掘坑跡群発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター
- ・小林行雄 1965 『古鏡』 学生社
- ・寒川旭 1992 『地震考古学』 中央公論社
- ・杉原荘介・大塚初重編 1991 『合本・土師式土器集成』本編上巻 東京堂出版
- ・田中琢 1983 「方格規矩四神系倭鏡分類試論」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- ・福岡澄男 2002 「広がる交流」『大河内展-弥生社会の発展と古墳の出現-』 財大阪府文化財調査研究センター
- ・北条芳隆 1998 「神仙思想と朱と倭人-弥生時代から古墳時代へ-」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社
- ・柳本照男ほか 1987 『摂津豊中大塚古墳』(豊中市文化財調査報告第20集) 豊中市教育委員会
- ・吉田野乃・高萩千秋・西村公助 2002 「卑弥呼の時代と八尾-河内の大集落出現と古墳の始まり-」 八尾市立歴史民俗資料館
- ・米田文孝 1983 「搬入された古式土師器-摂津・垂水南遺跡を中心として-」『関西大学考古学研究室開設 参拾周年記念考古学論叢』 関西大学考古学研究室
- ・和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」『岩波講座日本考古学』3 岩波書店

報告書抄録

ふりがな	たるみいせきはつつつちょうさほうこくしょI
書名	垂水遺跡発掘調査報告書I
副書名	垂水遺跡第24次発掘調査
巻次	
シリーズ名	
編集者名	堀口健二 西本安秀 田中充徳
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL 06(6384)-1231
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
垂水遺跡	吹田市垂水町 1丁目731-28、 -29	27205	86	34° 45' 57"	135° 30' 16"	19980422～ 19980618	205	共同住宅 の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡	集落遺跡 水田跡	古墳時代 平安時代 鎌倉時代 江戸時代	ピット、 落ち込み 土坑 溝 水田畦畔 足跡 流路	石器 弥生土器(後期)、 銅鏡、銅鏃、古式土師器 木器(船形木製品) 銚形状土製品 韓式系土器、須恵器 瓦器、土師器、陶器 磁器、銭貨、土製玩具	銅鏡(破砕鏡)が出土 銚造関連遺物が出土 内面水銀朱付着土器が出土 外来系土器が出土

遺物観察表

<遺物観察表凡例>

- ・挿図に掲載した遺物は全て観察表で収載しているが、写真のみ図版で掲載したものについては収載していない。
- ・観察表中の記述内容は遺物番号、器種・形式、層位・部位・遺構、残存状況、寸法(cm)、色調、略年代、産地、備考の順に記した。産地の項で記述なき箇所は、在地産を表している。略年代は時代名の後に()して世紀を並記しているが、古墳時代前期以前については、時代区分名のみとした。
- ・色調は小山正忠・竹原秀雄1987『新版・標準土色帖』を使用し、外面・内面・断面の順に記した。

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
1	弥生土器 手觸形土器	E12付近	第1面 高さ小1	胴部 1/4 残存	口径12.0 胴径11.2 高さ7.2	全) 灰白色7.5YR 8/1 ~ 8/2	弥生時代後期後半	口縁部内面に磨部の明白痕あり 胴部は凸帯を含まず
2	瓦器焼	E12付近	第1面 高さ小1	口縁部 1/7 残存	口径15.0 高さ4.7	外内) 灰色N4/0 ~ 灰白色7.5YR 8/1 断) 灰白色7.5Y 2/1	平安時代 (11世紀末~12世紀前半)	口縁内面に沈線を描す 横溝型
3	陶器焼	E12付近	第1面 構1	高台部 1/2 弱残存	高さ4.8 口径2.1	焼物) 明焼灰色5P 7/1 (断) にぶい黄褐色2.5YR 5/3 断) 明焼灰色5P 7/1	江戸時代 (16~19世紀)	内面に呂線跡あり 見込みに重ね焼き痕あり
4	土師器小皿	E10付近	第2面 高さ小2	全体の 3/5 残存	口径11.6 胴径2.7	全) にぶい黄褐色10YR 7/3	室町時代 (14世紀後半~15世紀)	手づくね成形
5	土師器小皿	E10付近	第2面 構3	口縁部 1/3 残存	口径8.4 胴径1.3	外) 褐色3.5YR 7/3 内) にぶい黄褐色10YR 7/3 断) 強い黄褐色10YR 8/4	江戸時代 (17世紀以降)	ロク口成形 灯列皿 口縁部外面に灯芯油痕(少~丸状物質)が付着
6	土師器具胎	E10付近	第2面 ヒット1	全体の 7/10 残存	残存径5.9 残存幅3.8 胎底径2.1	全) 褐色3.5YR 7/6	江戸時代 (18~19世紀)	室町時代後にナナ子調製 表面に金葉母
7	弥生土器 水差し形土器	E10付近	第3面 水田区画5	体部片	高さ9.5	全) 灰白色7.5YR 8/1	弥生時代後期	山體派か
8	土師器小皿式威蓋	E10付近	第3面 水田区画2	胴部 1/2 残存	口径11.8 胴径9.1 高さ5.3	全) にぶい黄褐色10YR 7/3	古墳時代前期	内面に水継糸が付着
9	弥生土器蓋	E10付近	第3面 水田区画6	口縁部 1/3 残存	口径10.0 胴径13.2 高さ8.6	外) 明焼褐色10YR 5/6 内) にぶい黄褐色10YR 5/3 断) にぶい黄褐色10YR 4/3	弥生時代中期後半	体部外周は指押さえ痕にナナ子
10	弥生土師鉢	E10付近	第3面 水田区画6	口縁部 1/6 残存	口径15.2 高さ5.6	外断) 灰白色10YR 7/1 内) 灰白色10YR 8/2	弥生時代後期後半	
11	陶器種鉢	E10付近	第3面 水田区画6	底部 1/7 残存	高さ17.0 口径3.2	全) 褐色7.5YR 6/8	中世	7条1厘みの障り目 縁部は土師質に近い
12	土師器平	E5.5- NS.3付近	第3面 水田区画5	ほぼ球形	口径16.3 胴径3.9	全) にぶい黄褐色10YR 7/3	平安時代 (10世紀代)	
13	土師器小皿	E5.5- NS.3付近	第3面 水田区画4	完整	口径8.9 胴径1.6	外) 灰白色7.5YR 8/1 内) 灰白色7.5YR 8/2	平安時代末~鎌倉時代 (12~13世紀)	ロク口成形 底面回転糸切り

番号	墓 名	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(m)	色 質	時期	備考
14	築柱土器		第4層 土坑2	全部残存	台座4.4 残高5.1	全) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
15	土師器小形丸底蓋	E12 - E13 N5 - N6	第4層 土坑2	口縁部1/4残存	口縁10.6 胴座8.0 残高6.0	外断) 褐色色2.5YR 8/3 内) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
16	土師器杯		第5層 ピット5	杯部残存	口縁17.8 残高8.3	外) 灰褐色10YR 6/2 内断) にぶい褐色5YR 7/3	古墳時代初期～前期	内面に水磨赤土付着 外断に二次焼成痕 高杯の胴を切断して二次加工
17	土師器甕		第7層 部込み5	口縁部1/3残存	口縁12.8 残高7.0	外) 明褐色10YR 6/6 内断) 黄灰色2.5Y 5/1	古墳時代前期	体部外面に丁寧なナズ、体部に1本の線刻あり 布目式置
18	陶器土鍋		第2層	全体1/2残存	口縁15.4 底径5.4 残高8.5	植物) 褐色色5YR 8/4 器胎外) 灰白色10Y 7/1 器胎内) 灰白色5Y 8/2	江戸時代 (18世紀後半 ～19世紀初期)	銅子鍋もしくは石製石鍋
19	陶器土鍋	E0 - E6	第2層	口縁部1/6部残存	口縁26.4 残高6.7	外) 暗赤褐色2.5Y 3/2 内) 褐色色5YR 4/1 断) 灰褐色7.5YR 5/1 ～にぶい赤褐色5YR 5/3	江戸時代 (18世紀後半 ～19世紀初期)	8条1組みの罫り目 器底もしくは器口裏
20	土製玩具土人形	E12 - E20	第4 - 1層	頭部欠損	残高6.3 左右径3.6 前後径2.5	全) 灰白色10YR 8/2	江戸時代 (17世紀前半以後)	素焼き+型合わせ成形 大塚系
21	赤黄陶器器具柄皿		第4 - 2層	全体2/5残存	器高3.2 胴径6.7 底径4.0	植物) 明褐色7.5GY 7/1～ 緑灰色7.5GY 5/1 下地) 明赤褐色2.5YR 8/5	江戸時代 (18～19世紀)	上下分断成形
22	陶器土器口蓋	E4 - E8 N4 - N8	第5層	胴部1/3残存	口縁16.9 残高7.9	外内) 黄灰色5B 6/1～5/1 断) 灰白色N 7/0	古墳時代中期 (5世紀前半)	輪式系土器 体部外面に赤子目叩き
23	赤土師器口蓋	N3 - N5	第6層	口縁部1/9残存	口縁20.0 残高3.1	全) 灰白色2.5Y 8/2	赤土師時代後期	口縁外面に赤土付着跡、内面に羽状赤点紋を施す 東海系
24	土師器甕	E13 - E18 N3 - N5	第6層	口縁部1/2残存	口縁11.1 残高3.8	外) 褐色色2.5Y 5/2 内) 灰褐色10YR 6/2 断) 黄灰色2.5Y 4/1	古墳時代前期	古輪式系(陶輪式土器)
25	土師器高杯	E18 - E22 N3 - N6	第6層	杯部～胴部残存	口縁17.6 残高13.4	外) にぶい黄褐色10YR 7/3 内断) にぶい褐色5YR 6/3	古墳時代前期	
26	土師器S字状口蓋甕	E22 - E26 N3 - N8	第6層	口縁部1/2残存	口縁13.0 残高3.8	全) 灰白色2.5Y 8/1～8/2	古墳時代前期	東海系

番号	形 態	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
27	弥生土器二重口横溝	E18 - E22 N3 - N8	第6層	口縁部1/10残存	口径16.7 高さ3.1	外) 灰白色10YR 8/2 内側) 黄褐色2.5Y 8/3	弥生時代前期後半 ～古墳時代初期	
28	陶器土器もしくは 須恵器高台	E13 - E18 N3 - N5	第6層	高さ1/20残存	高さ33.0 口径2.8	外内) 灰白色N 8/0 ～灰色10Y 5/1 断) 灰白色7.5Y 7/1	古墳時代中期 (5世紀初期)	14号1組みの波状紋の上から竹管状を施す 各方向の透かしを穿つ 縄瓦土器
29	須恵器杯身	E19 - E20 N3 - N4	第6層	高台1/4残存	高さ19.4 口径2.2	全) 灰白色10Y 6/1	奈良時代 (8世紀)	
30	須恵器杯身		第6層	高台1/7残存	口径16.8 高さ12.3 器高3.9	外) 灰白色N 7/0 内側) 明青灰色5P B 7/1	奈良時代 (8世紀前半)	
31	須恵器蓋	E18 - E22 N3 - N5	第6層	蓋部1/4残存	直径11.0 高さ5.5	外内) 明青灰色5P B 7/1 断) 黄褐色2.5Y 7/4	平安時代 (9世紀以降)	
32	土師器鉢鉢	E14ライン	第7層	口縁部1/6残存	口径16.6 断径12.7 高さ4.9	全) 灰白色10Y R 8/2	古墳時代初期	東国国系
33	土師器有段鉢鉢		第7層	頸部1/5残存	断径13.4 高さ4.0	全) 灰白色10Y R 8/2	古墳時代前期	内面に水継糸が付着 外面に二次焼成痕
34	土師器有段鉢鉢		第7層	口縁部1/8残存	口径16.7 高さ5.3	外) にぶい黄褐色10Y R 6/3 内) にぶい黄褐色10Y R 7/3 断) 褐色5Y R 6/8	古墳時代前期	
35	土師器5字状口横溝		第7層	口縁部1/6残存	口径11.4 高さ4.8	全) 灰黄褐色10Y R 6/2	古墳時代前期	東海系
36	土師器小型丸底蓋		第7層	口縁部1/2残存	口径8.8 断径8.8 径高7.0	外内) にぶい黄褐色10Y R 7/2 断) 灰白色10Y R 7/1	古墳時代前期	
37	土師器杯	E4 - E8 N5 - N8	第7層	口縁部1/12残存	口径19.6 口径3.0	全) 黄褐色2.5Y 7/3	奈良時代 (8世紀)	
38	弥生土器広口甕	E22 - E26	第8層	口縁部1/4残存	口径21.0 高さ5.8	外内) 灰黄色2.5Y 7/2 断) 灰黄色2.5Y 6/2	弥生時代後期	
39	弥生土器広口甕	E16 - E17 N4 - N6	第8層	口縁部1/3残存	口径18.0 口径高5.9	全) にぶい灰黄褐色10Y R 8/2	弥生時代後期	
40	弥生土器広口甕	E8 - E10	第8層	口縁部1/4残存	口径16.8 高さ6.6	外内) 灰白色10Y R 8/1 断) にぶい黄褐色10Y R 7/3	弥生時代後期	

番号	遺 蹟	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
41	新生土器 手垢形土器	E16-E17 N4-N6	第8層	胴部1/6残存	口径13.4 胴径17.4 高さ8.0	全) 灰白色2.5Y7/1	新生時代後期後半	胴径は次巻を含まず
42	新生土器直口甕	E14-E16 N4-N6	第8層	体部1/10残存	胴径20.0 胴径5.1	外) 灰白色2.5Y8/1~7/1 内) 黄灰色N3/0 断) 灰白色2.5Y8/1	新生時代後期	体部に波状彫刻 手垢形土器の可能性もあり 古備系
43	新生土器蓋	E20-E23 N6-N8	第8層	全体1/2残存	直径11.3 高さ1.0	全) 灰黄色2.5Y7/2	新生時代	周縁に二孔一対の小孔
44	新生土器蓋	E23-E24 N6-N8	第8層	口縁部1/6残存	直径9.0 高さ0.8	全) 黄灰色2.5Y7/3	新生時代	周縁に二孔一対の小孔
45	新生土器小型甕	E10-E14 N8付近	第8層	底部1/2残存	直径3.8 胴径6.0 高さ4.6	外) 灰黄色10YR6/2 内断) 土に近い黄褐色 10YR7/2	新生時代後期	
46	土師器甕	E18ライン	第8層	口縁部1/5残存	口径15.2 高さ5.3	外断) 土に近い黄褐色 10YR4/3 内) 灰黄色10YR4/2	古墳時代初期	庄内式甕
47	土師器甕	E18ライン	第8層	口縁部1/4残存	口径15.9 高さ8.4	外断) 土に近い黄褐色 10YR7/1 内) 灰黄色10YR6/1	古墳時代初期	V樽式古甕
48	土師器甕	E14-E16 N8	第8層	口縁部1/4残存	口径15.8 高さ4.2	外) 灰黄色2.5Y6/2 内断) 灰黄色2.5Y7/2	古墳時代初期	庄内式甕
49	土師器甕	E14-E16 N4-N6	第8層	口縁部1/10残存	口径17.0 高さ3.7	外) 土に近い褐色7.5YR6/3 内) 黄褐色7.5YR7/2 断) 灰白色7.5YR8/2	古墳時代初期	庄内式甕 口縁部外縁に1条の溝刻あり 河内系 生駒山西麓産の基土
50	土師器甕	E26付近 N2-N3	第8層	口縁部1/4残存	口径5.8	外) 灰白色10YR8/1 内) 灰白色2.5YR7/1 断) 灰白色2.5Y7/1~8/1	古墳時代初期	肩部に7条1組みの山形線を施す
51	土師器二重口甕	E12-E14 N6-N8	第8層	口縁部1/9残存	口径23.5 高さ4.9	外) 内) 土に近い黄褐色10YR7/2 断) 黄褐色10YR6/1 ~ 土に近い黄褐色10YR7/2	古墳時代初期	
52	甕形土器	E12-E14 N6-N8	第8層	鉢部4/5残存	口径12.0 高さ7.8	外) 灰白色2.5Y8/2~8/1 内) 灰白色2.5Y8/1~7/1 断) 灰白色2.5Y8/1	古墳時代初期~前期	口縁部外縁に 53の台巻と同一面体か 東四国(備前)系
53	甕形土器	E14-E16 N6-N8	第8層	台部1/3残存	直径3.8 高さ5.2	外) 内) 黄灰色2.5Y6/1 ~ 5/1 断) 灰白色5Y7/1	古墳時代初期~前期	52の鉢部と同一面体か

番号	遺 址	出土地区	層位・遺構	保存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
54	堀江土器	E16 - E18 N 6 - N 8	第8層	台座残存	底径3.7 残高3.6	全) 灰白色5Y 8/1	古墳時代初期～前期	
55	土師器高木	N 3 - N 4	第8層	口縁部 1/4 残存	口径18.4 残高7.0	外) 灰白色のため不明 内) 水磨赤付帯のため不明 断) 灰白色10Y R 7/3	古墳時代前期	内面に水磨赤が付帯 外面に二次焼成痕
56	土師器頸飾台	E20 - E21 N 3 - N 4	第8層	口縁部 1/3 残存	口径19.6 残高5.1	外) 灰白色1.5Y 8/1 内) 灰褐色10Y R 8/3 断) 灰白色10Y R 8/2	古墳時代初期～前期	山陽系
57	土師器 ミニニチエ土器高木	E12 - N 4	第8層	胴部残存	残高3.0	全) 灰白色10Y R 8/1	古墳時代	
58	土師器 ミニニチエ土器	E22ライン	第8層	約 1/2 残存	口径3.8 残高4.4	外断) 灰白色10Y R 8/1 内) 灰白色10Y R 8/2	古墳時代	手づくね
59	土師器台付鉢	E 8 - E10 N 8 付近	第8層	台座残存	残高2.6 底径5.4	外(内) 灰白色10Y R 8/2 断) 灰黄色1.5Y 7/2	古墳時代初期～前期	
60	土師器台付鉢	N 4 - N 5	第8層	台座残存	底径7.8 残高4.3	全) 灰白色1.5Y 8/2	古墳時代初期～前期	
61	土師器 二重口磨大皿鉢	E16 - E18 N 8 付近	第8層	胴部～体部	胴径40.8 胴高23.3	全) にぶい黄褐色10Y R 7/2	古墳時代前期	胴部に6条1組の凹凸紋を施す 山陽系
62	土師器鉢	E25 - E26 N 0 - N 2	第8層	全体 1/2 残存	口径16.1 残高5.3	外) にぶい黄褐色10Y R 7/3 内) にぶい黄褐色10Y R 7/2 ～にぶい褐色1.5Y R 7/4 断) 灰白色10Y R 8/1	古墳時代前期	内面に水磨赤が付帯 外面に二次焼成痕
63	土師器高木鉢	E14 - E18 N 4 - N 8	第8層	口縁部 1/3 残存	口径15.4 残高5.5	外(内) 褐色1.5Y R 6/6 断) にぶい褐色1.5Y 7/4	古墳時代前期	
64	土師器小型鉢	E10 - E12 N 6 - N 8	第8層	口縁部 1/8 残存 体部 1/2 残存	口径15.0 残高6.8	外) 灰褐色10Y R 6/2 内断) にぶい黄褐色10Y R 7/2	古墳時代前期	
65	土師器二重口磨鉢	E22 - E24 N 1 - N 2	第8層	胴部 1/3 残存	口径21.5 残高16.1	外) 灰白色5Y 8/1～7/1 内) 灰白色10Y 4/1 ～灰白色5Y 8/1 断) 灰白色1.5Y 8/1	古墳時代前期	胴部に花線と磨砂紋を施す 山陽系
66	土師器鉢	E 8 - E10 N 8 付近	第8層	胴部 1/6 残存	残高11.8 胴径12.3	外) 灰白色10Y R 8/1～8/2 内断) 灰白色10Y R 8/1	古墳時代前期	胴部に磨砂紋と竹管紋を施す 山陽系
67	土師器高木口磨	E12 - E14 N 6 - N 8	第8層	胴部 1/4 残存	口径21.8 残高9.3	外(内) 灰黄色1.5Y 7/2 断) 灰オリーブ色5Y 4/2	古墳時代前期	

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
68	土師器小型壺	E13ライン	第8層	口縁部1/2残存	口径7.2 残高2.8	全) 灰白色2.5Y8/2 ~灰灰色2.5Y5/1	古墳時代前期	古墳系
69	土師器壺	E10-E12 N6-N8	第8層	口縁部7/10残存	口径12.0 残高7.8	全) 灰褐色7.5YR6/2		
70	土師器重口壺	E12-E14 N6-N8	第8層	頸部4/5残存	頸部18.0 残高8.4	全) 灰白色2.5Y8/1	古墳時代初葉~前期	
71	土師器重口壺	E14-E16 N4-N6	第8層	口縁部残存	口径17.9 残高8.4	全) 灰褐色10YR6/2	古墳時代前期	
72	土師器壺	E14ライン	第8層	7/10残存	口径14.0 肩高16.8 胴高20.4	全) 灰褐色2.5Y7/2	古墳時代前期	
73	土師器二重口壺	E22-E24 N1-N2	第8層	口縁部1/2残存	口径22.4 残高10.2	外) 灰白色10YR8/1~7/1 内) 灰褐色10YR7/2 附) 灰白色10YR7/1	古墳時代前期	
74	土師器二重口壺	E20-E22 N4-N6	第8層	口縁部1/8残存	口径8.2 残高4.5	外) 灰白色10YR7/1 内) 灰褐色10YR7/2 附) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	西宮郡戸内系
75	土師器壺	E13ライン	第8層	口縁部1/5残存	口径12.7 残高5.5	外) 灰褐色7.5YR6/2 ~褐色7.5YR6/8 内附) 灰褐色 10YR7/2	古墳時代	
76	土師器試口壺	E24-E26 N2-N4	第8層	口縁部1/3残存	口径15.4 残高5.0	外) 灰白色2.5Y8/2 内) 灰白色2.5Y8/1 附) 灰白色5Y6/1	古墳時代初葉	
77	土師器壺	E22-E24 N2-N4	第8層	口縁部1/3残存	口径16.4 残高8.2	外内) 灰褐色10YR7/2 ~灰褐色10YR5/6 附) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	
78	土師器試口壺	E12-E14 N6-N8	第8層	口縁部3/5残存	口径19.2 残高7.3	全) 灰褐色10YR7/3	古墳時代前期	東四国系
79	土師器二重口壺	E22-E26 N1-N2	第8層	口縁部1/3残存	口径12.6 残高5.6	外附) 灰白色7.5Y7/1 内) 灰褐色7.5Y6/1	古墳時代前期	頸部に磨状の磨き 山形系
80	土師器小型試壺	E22-E24 N1-N2	第8層	口縁部1/5残存	口径7.0 肩高7.6 残高7.6	外) 灰白色2.5Y8/1 内) 青オリーブ灰2.5Y8/1 附) 灰褐色7.5Y6/1	古墳時代前期	

番号	形 態	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色 票	時 期	備 考
81	土師器小皿丸底蓋	E12・E14 N6・N8	第8層	口縁部3/5残存	口径11.3 胴径8.1 脚高7.6	全) ぶい黄褐色10YR 6/3	古墳時代前期	
82	土師器小皿丸底蓋	E12・E14 N6・N8	第8層	口縁部1/8残存	口径10.5 脚高4.5	外内) 黄灰色2.5Y 5/2 胴) 黄灰色2.5Y 5/1	古墳時代前期	
83	土師器小皿丸底蓋	E8・E10 N8付近	第8層	全体1/2残存	口径11.9 胴径8.7 脚高8.2	外内) 灰白色10YR 8/1 胴) 黄褐色5YR 7/2	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕 口縁～体部外面は細かい磨き
84	土師器小皿丸底蓋	E8・E10 N8付近	第8層	口縁部1/3残存	口径9.2 胴径8.4 脚高7.2	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	
85	土師器小皿丸底蓋	E12・E14 N6・N8	第8層	全体4/5残存	口径11.9 胴径8.9 脚高7.0	外内) 灰黄色2.5Y 7/2 内) 灰黄色2.5Y 6/2	古墳時代前期	東西両系 内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
86	土師器小皿丸底蓋	E1・E12 N6・N8	第8層	全体1/2残存	口径8.6 胴径3.0	外) 灰付着のため不明 内) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
87	土師器小皿丸底蓋	E22・E24 N1・N2	第8層	口縁部1/3残存	口径11.2 胴径9.5 脚高4.5	胴) 灰白色10YR 7/1 ～黄灰色10YR 4/1	古墳時代前期	外面は著しく薄減
88	土師器胡堂	E18ライン	第8層	完形	口径4.1 胴径5.8 脚高9.3	外) にぶい黄褐色10YR 7/2 内) 灰白色10YR 8/1	古墳時代前期～前期	内面に指ナデ
89	土師器甕	E25・E26 N1・N3	第8層	ほぼ完形	口径12.0 胴径16.4 脚高16.5	全) 淡黄褐色10YR 8/3	古墳時代前期	布面式甕 縁がやや厚い
90	土師器甕	E25・E26 N1・N3	第8層	口縁部1/8残存	口径13.8 胴径6.9	外) 黒褐色2.5Y 2/1 内内) にぶい黄褐色10YR 4/3	古墳時代前期	布面式甕
91	土師器甕	N4・N5	第8層	口縁部残存	口径14.3 胴径6.9	外) 灰白色2.5Y 8/1～7/1 内) 灰白色2.5Y 8/2	古墳時代前期	布面式甕
92	土師器S字状口甕蓋	E14・E16 N4・N6	第8層	口縁部1/4残存	口径13.0 胴径4.0	外内) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	東西両系
93	土師器甕	E25・E26 N1・N3	第8層	口縁部1/5残存	口径15.2 脚高7.2	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	東西両系 体部外面はハゲ調整

番号	時期	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
94	土師器Ⅱ	E8-E13 N6-N8	第8層	口縁部1/2残存	口径10.8 胴径12.0 器高10.9	外断) にぶい黄褐色 10YR 7/3 内) 灰黄褐色10YR 6/2	古墳時代前期	
95	土師器Ⅱ	E18ツイン	第8層	口縁部1/4残存	口径12.6 胴径13.8 器高7.2	外) 黄灰褐色2.5Y 4/2 内断) 黄灰褐色2.5Y 5/2	古墳時代前期	外面に磨汰工具による削り痕あり
96	土師器Ⅱ	E19-E20 N2-N4	第8層	口縁部1/2残存	口径13.2 器高3.1	外) にぶい黄褐色10YR 7/3 ~黄灰色10YR 6/1 内) 灰黄褐色10YR 6/2 断) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
97	土師器Ⅱ	N4-N5	第8層	口縁部1/2残存	口径9.6 器高3.0	外) 灰白色2.5Y 8/1 内断) 灰白色2.5Y 8/2	古墳時代前期	布留式蓋
98	土師器台付き蓋	E18-E19 N2-N4	第8層	台部完全	残高5.5 器径3.2	外) 灰白色2.5Y 8/1 内) にぶい黄褐色10YR 7/2 断) 灰白色10YR 7/1~8/1	古墳時代初期~前期	東海系
99	土師器坏	E22ツイン	第8層	口縁部1/4残存	口径3.9 残高3.0	外内) にぶい黄褐色10YR 7/2~灰黄褐色10YR 6/2 断) にぶい黄褐色10YR 7/2	奈良時代 (8世紀)	
100	木簡紙幣	E26 N2-N3	第8層	頭部~腰部	残長3.3 全幅3.8 厚み3.0			割溝式だが、割溝式紙幣の痕跡を表現した“雁 脚器型”あり 墨目痕あり
101	丹波水鏡品 もしくは 船形器	E1.25 -N6	第8層	完整	全高20.3 全幅8.5 全径5.8			未定産品か
102	弥生土器Ⅱ	E14-E22 N6-N8	第9層	口縁部1/3残存	口径14.7 残高3.1	外) 灰白色2.5Y 7/1 内) 灰褐色2.5Y 7/2 断) 灰白色2.5Y 8/2	弥生時代後期	
103	弥生土器Ⅱ	E18ツイン	第9層	全体3/5残存	胴径18.5 底径18.8 器高21.3	外) 灰白色2.5Y 8/1 内断) 灰白色2.5Y 6/1	弥生時代後期	体部二分割成形
104	弥生土器高坏	E22-E23 N0-N4	第9層	ほぼ完全	口径22.4 器高16.4 器径15.2	全) 灰白色2.5Y 7/1	弥生時代後期	

番号	遺 産	出土地区	層位・遺跡	発状状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
105	土師器 小型丸底甕	E14付近	第9層	口縁部1/3残存 体部完存	口径9.6 胴径6.9 器高6.7	全) 灰褐色2.5Y7/2	古墳時代前期	
106	土師器 小型丸底甕	E12-E18 N2-N4	第9層	体部完存	胴径6.3 器高3.9	外胴) 明褐色10YR7/1 内) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	
107	土師器 小型丸底甕	E12-E14 N4-N6	第9層	体部ほぼ完存	胴径7.3 器高6.2	外胴) 灰黄褐色10YR6/2 内) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	
108	土師器 小型丸底甕	E12-E14 N4-N6	第9層	口縁部1/5残存	口径13.0 胴径8.4	外) 黒作兼のため不明 内) 黒灰色5YR7/4 胴) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
109	土師器 台付壺鉢	E14-E16 N4-N5	第9層	台部完存	台径4.8 器高5.1	全) 灰褐色7.5Y6/3~4/1	古墳時代初期前後	
110	甕埴土器	E12-E18 N2-N4	第9層	胴部残存	口径4.0 器高3.8	外) 灰白色10YR8/2 内胴) 灰白色5YR7/3	古墳時代前期	厚縁著しい
111	土師器 エニエ・ユ7 土器 台付鉢	E13ライン	第9層	台部完存	口径2.1	全) 灰白色10YR8/1	古墳時代初期~前期	東海系 /
112	土師器 台付壺	E12-E14 N4-N6	第9層	台径約3/4残存	口径5.4 器高3.9	外) 灰黄褐色10YR7/2 内) 灰黄褐色10YR6/2 胴) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	東海系
113	土師器 小型器台	E16-E17 N4-N6	第9層	胴部1/2残存	口径11.5 器高6.5	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	
114	土師器 甕	E13ライン	第9層	口径1/4残存 口縁1/4残存	口径12.0 胴径18.7 器高17.8	外) 灰白色7.5YR8/2 内) 灰白色2.5Y8/2 胴) 灰白色7.5YR8/2	古墳時代前期	布面式甕
115	土師器 甕	E13ライン	第9層	全体3/5残存	口径12.4 胴径16.8 器高12.8	全) 灰白色10YR8/1~5/1	古墳時代前期	布面式甕
116	土師器 甕	E13ライン	第9層	全体2/5残存	口径13.0 胴径16.8 器高17.5	外) 灰黄褐色7.5YR8/4 内) 灰白色7.5YR8/2 胴) 灰褐色5YR8/3	古墳時代前期	布面式甕
117	土師器 甕	E13ライン	第9層	口縁部3/4残存	口径11.7 器高5.5	外) 灰白色2.5Y8/2 内胴) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	布面式甕

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色 調	時 期	備 考
118	土師器甕	E13ライン	第9層	全体3/5残存	口径12.4 底径16.8 残高12.8	全) 灰白色10YR 8/1 ~灰白色10YR 5/1	古墳時代前期	布留式甕
119	土師器直口壺	E12・E18 N2・N4	第9層	口縁部1/3残存	口径18.0 残高8.2	外内) 灰白色2.5Y 8/2 断) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代初期~前期	
120	土師器二重口輪蓋	E12・E18 N4・N6	第9層	口縁部1/2残存	口径12.0 残高4.2	外) 黒褐色2.5Y 3/1 内) 灰黄色2.5Y 5/1 断) 灰黄色2.5Y 6/2	古墳時代前期	山形系
121	土師器残鉢	E13附近	第9層	口縁部2/3残存	口径14.8 残高4.6	全) 明褐色7.5Y 7/2	古墳時代前期	
122	土師器小皿蓋	E14・E16 N4・N6	第9層	口縁部1/4残存	口径9.8 底径9.8 残高5.4	外) 黄灰色2.5Y 5/2 内) 灰黄色2.5Y 6/2 断) 黄灰色2.5Y 4/1	古墳時代初期	
123	土師器有段残鉢	E24・E25 N2・N5	第9層	口縁部1/4残存	口径15.4 残高1.5	外内) 灰オリーブ2.5Y 6/2 断) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代前期	
124	弥生土器甕	E15・E16 N6・N7	第5面直上	胴部3/4残存	胴径22.5 底径6.0 残高17.0	全) 灰白色10YR 8/1 ~灰N 6/0	弥生時代後期後半	胴部にタタキ目を残す
125	弥生土器甕	E15・E16 N7・N8	第5面直上	口縁部1/4残存	口径20.8 残高5.3	全) にぶい黄褐色10YR 7/2 ~灰黄褐色10YR 5/2	弥生時代後期	
126	弥生土師器直口壺	E13・N14 N4・N5	第5面直上	ほぼ完形	口径14.2 胴径28.0 底径6.3	外) 褐色5YR 7/6 ~灰白色5YR 8/1 内) 灰白色5YR 8/2 断) 灰白色10YR 7/1	弥生時代後期	体部外面の取目を狙く子字溝し
127	弥生土器甕	E18・E19 N3・N4	第5面直上	口縁部完存	口径16.0 残高5.3	全) 灰白色2.5Y 8/1	弥生時代後期	
128	土師器直口壺	E13・N14 N5・N6	第5面直上	口縁部1/3残存	口径16.4 残高6.0	外内) 黒褐色2.5Y 3/1~灰黄 色2.5Y 7/2 断) 灰褐色2.5Y 7/2~暗灰黄 色2.5Y 3/2	古墳時代前期	
129	土師器甕	E15・E16 N6・N7	第5面直上	口縁部1/7残存	口径12.8 残高6.7	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代初期	
130	土師器有外	E14・E15 N7・N8	第5面直上	胴部1/3残存 胴部完存	底径13.8 残高14.5	外) 灰白色2.5Y 8/2 内断) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代初期	

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色 調	時 期	備 考
131	土師器小型丸蓋	E19-E20 N1-N2	第5面直上	口縁部1/4残存 胴部完存	口径8.4 胴径8.3 高さ1.0	全) 褐色2.5Y7/3	古墳時代前期	
132	土師器	E19-E14 N7-N8	第5面直上	ほぼ完形	口径12.4 底径3.4 高さ22.0	全) 灰白色7.5YR 8/1 ~灰褐色7.5YR 6/2	古墳時代前期	表面に加飾條 状土器
133	土師器	E18-E16 N3-N4	第5面直上	口縁部7/10残存	口径12.3 胴径20.7 高さ15.7	外) 灰白色10YR 7/1 内) 褐色10YR 5/1	古墳時代前期	布師式
134	弥生土師器	E11-E12 N5-N6	第6面直上	口縁部1/4残存	口径17.0 高さ6.2	全) 灰白色10YR 8/1	弥生時代後期	古儀系 上式土器
135	弥生土師器有孔鉢	E11-E13 N6-N7	第6面直上	底部残存	底径4.2 胴径5.1	外) 灰褐色2.5Y 6/2 ~黄灰色2.5Y 5/1 内) 黄灰色2.5Y 6/1	弥生時代後期	底部に穿孔
136	弥生土師器大筒鉢	E11 -N7.5	第6面直上	把手部残存	高さ8.1	外) 褐色10YR 5/1~4/1 内) 灰白色5Y 8/1	弥生時代後期	
137	弥生土師器口蓋	E11 N6-N7	第6面直上	頸部1/3	胴径16.1 高さ5.6	外) 灰白色2.5Y 8/1~8/2 内) 褐色10YR 4/1 内) 灰白色2.5Y 8/2	弥生時代後期	西部開口内式 胴部に多角状條の突帯を施す
138	弥生土師器杯	E20-E21 N3-N4	第6面直上	完形	口径22.3 器高15.7	全) 灰白色10YR 8/1 ~褐色10GY 6/1	弥生時代後期	外部内面に朱が付着 外面至直に二次焼成痕
139	弥生土師器腹盤	E14-N5	第6面直上	完形	口径6.2 胴径14.6 高さ23.1	外) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰白色2.5Y 8/1	弥生時代後期	外面は細かい磨き 体部二分磨成形
140	土師器	E25-E26 N1-N2	第6面直上	全体1/2残存	口径13.0 胴径16.4 高さ17.3	外) 灰白色2.5Y 7/1 内) 灰白色10YR 8/1	古墳時代前期	布師式
141	土師器		第6面直上	口縁部7/10残存	口径12.4 胴径17.6 高さ13.7	外) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代後期	布師式
142	土師器大口蓋	E12-E13 N7-N8	第6面直上	上半部完存	口径11.7 胴径14.8 高さ8.8	全) 灰白色10YR 7/1	古墳時代前期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	保存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
143	土師器甕	E10・E11 N6・N7	第6面直上	胴部7/10残存 体部7/10残存	口径15.0 胴径22.0 残高12.7	全) 灰黄色2.5Y8/3	古墳時代前期	布疋式甕
144	土師器高杯	E25・E26 N2・N3	第6面直上	杯部2/3残存	口径17.4 残高5.7	外) 灰白色2.5Y8/1 内) 灰白色2.5Y7/1 新) 灰黄色2.5Y6/1	古墳時代前期	
145	土師器高杯	E25・E26 N1・N2	第6面直上	胴部完存	口径11.4 残高11.8	全) 褐色10YR6/1	古墳時代初期	
146	土師器底口壺	E25 N4・N6	第6面直上	口縁部1/4残存	口径19.6 残高4.5	外内) ほぼ褐色7.5YR7/3 新) 褐色7.5YR5/1	古墳時代前期	真四角系
147	土師器台付鉢	E23・E24 N2・N3	第6面直上	台部完存	台径12.3 残高3.6	外新) 灰黄色2.5Y7/1 内) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代初期～前期	
148	土師器小型丸底甕		第6面直上	口縁部1/5残存	口径19.8 胴径3.4 残高4.4	外内) ほぼ黄褐色10YR7/2 新) 褐色灰黄色2.5Y5/2	古墳時代前期	
149	土師器小型丸底甕	E13・E14 N4・N5	第6面直上	口縁部1/2残存 体部完存	口径21.3 胴径3.5 残高7.9	外内) 灰白色2.5Y8/2 新) 灰白色5Y8/1 ～灰色N4/0	古墳時代前期	口縁内面之胴部に金属状の腐海物質が付着 体部に剥離後の穿孔あり
150	土師器小型丸底甕	E25・E26 N1・N2	第6面直上	口縁部3/4残存	口径10.2 胴径8.5 残高7.2	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	
151	土師器直口壺	E13・E14 N5・N6	第6面直上	口縁部完存	口径19.8 残高13.0	全) 褐色10YR8/3	古墳時代前期	
152	土師器直口壺	E9・E11 N5・N6	第6面直上	口縁部完存	口径21.6 残高8.2	外内) 褐色2.5Y7/3 ～灰黄色2.5Y6/2 新) 灰黄色2.5Y6/2	古墳時代前期	
153	土師器二重口縁壺	E9・E11 N5・N6	第6面直上	口縁部完存	口径23.4 残高9.9	外新) 灰白色7.5YR8/1 内) 褐色10YR6/1～4/1	古墳時代前期	
154	土師器直口壺	E13・E14 N5・N6	第6面直上	ほぼ完形	口径22.1 胴径30.0 残高36.0	外内) 灰白色2.5Y8/2 新) 灰白色2.5Y4/1	古墳時代初期～前期	体部外面に粘土巻き上げ痕が僅かに残る
155	用途不明水甕	E11・E12 N5	第6面直上	完形	全長14.7 全幅8.5 残高2.0			貫通した穴1ヵ所、未貫通の穴2ヵ所あり 表面に剥離痕あり

番号	器名	出土地区	層位・遺跡	保存状況	寸法 (cm)	色調	時期	備考
155	弥生土器浅鉢	E23 - E26 N1 - N5	第10層	口縁部1/8残存	口径23.3 高さ13.3	全) 赤灰色5YR 4/1 ~5YR 3/1 ~ 2/1	弥生時代前期	河内系 口縁部外面に5状のへら磨きは縁と、内外面に円形浮紋 体部内外面は磨き
157	弥生土器鉢	T 2	第10層	完形	口径18.8 高さ9.0 底径4.9	全) 灰白色10YR 8/1 ~黄褐色10YR 5/1	弥生時代後期	体部外面はナ子磨き 叩き目付僅かに残る
158	弥生土器 ミニチュア土器鉢	E18 - E22 N5 - N8	第10層	完形	口径2.5 高さ1.4 脚高2.9	外側) 灰赤褐色10YR 6/2 内) 黒色2.5Y 2/1	弥生時代	
159	ミニチュア土器高杯	E23 - E26	第10層	胴部片	高さ2.0	全) 灰白色10YR 8/2	弥生または古墳時代	4方向に刺突状を施して孔を表現
160	弥生土器深鉢	E23 - E26 N1 - N5	第10層	胴部1/2残存	口径9.0 高さ10.7	外側) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰黄色2.5Y 7/2	弥生時代後期	胴部に3状の刺刺あり
161	弥生土器甕	E18 - E23 N2 - N4	第10層	口縁部1/4残存	口径17.6 高さ4.5	外) 黒色2.5GY 2/1 内) にぶい黄褐色10YR 7/4 断) にぶい黄褐色10YR 7/3	弥生時代後期	吉備系
162	弥生土器高杯	E18 - E22 N2 - N5	第10層	杯部3/4残存 胴部残存	口径12.3 脚高7.8	外内) 明褐色7.5YR 7/2 断) 褐色2.5YR 7/6	弥生時代後期	
163	土師器高台	E23 - E26 N1 - N5	第10層	台胴部残存	高さ10.2 高さ6.2	全) 灰白色2.5Y 8/2	古墳時代前期	3方に円孔あり
164	土師器小部丸底蓋	E14ライン	第10層	口縁部1/3残存	口径12.6 脚高8.9 高さ7.0	全) にぶい黄褐色10YR 6/3	古墳時代前期	
165	土師器高杯		第11層	口縁部1/3残存	口径20.2 高さ5.8	全) 灰白色2.5Y 8/2	古墳時代初期	
166	土師器甕		第11層	ほぼ完形	口径10.1 脚高16.4 器高23.3	全) 灰白色10YR 8/1	古墳時代前期	表面に加熱痕 外面に重たいタキタキ目を残す 灰土層
167	土師器小型蓋		第11層	体部残存	脚高6.4 高さ4.7	全) 灰白色10YR 8/1	古墳時代初期	体部外面は細かい磨き 胴部に竹管状を遺す
168	土師器大口蓋		第11層	口縁部1/6残存	口径17.1 脚高11.9	外) 灰白色10YR 8/1 内側) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
169	弥生土器高杯		第11層	口縁部小片	口径25.9 高さ3.5	全) にぶい黄褐色10YR 7/3	弥生時代後期	

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色 調	時 期	備 考
170	土師器直口壺		第11層	口縁～体部完存	口径21.4 胴径30.0 残高26.5	外) 灰白色2.5Y 8/1 内筋) 灰白色2.5Y 8/1～7/1	古墳時代初葉～前期	
171	土師器高杯		第11層	口縁部1/4残存	口径16.4 高径5.2	全) にぶい黄褐色10Y R 7/3	古墳時代前期	
172	土師器小型丸底甕		第11層	口縁部1/4残存	口径9.9 胴径7.2 残高6.2	全) にぶい黄褐色10Y R 7/2	古墳時代前期	
173	弥生土器鉢		第13層	口縁部1/10残存	口径22.6 胴径4.6	外) にぶい褐色7.5Y R 3/3 内) にぶい褐色7.5Y R 6/3 筋) にぶい褐色7.5Y R 4/2	弥生時代中期後半	口縁周部に刻み目
174	弥生土器広口壺	E10付近 北壁	層位不明	口縁部1/4残存	口径23.2 残高11.9	全) 暗灰褐色2.5Y 4/2	弥生時代中期後半	河内系 生駒山西麓部の出土
175	土師器小型丸底甕	E12 北壁	層位不明	口縁部1/3残存	口径9.7 胴径8.4 残高4.0	外筋) 灰青褐色10Y R 5/2 内) 灰黄褐色10Y R 6/2	古墳時代前期	
176	土師器小皿	E19-E20 北壁	層位不明	口縁部1/10残存	口径11.8 残高1.4	全) 淡黄色2.5Y 8/3	平安時代 (10世紀後半 ～11世紀前半)	「て」の字状口縁直
177		E8-E14 N6-N8	第6層	体部小片		外内) にぶい黄褐色 10Y R 7/3 筋) 黄褐色10Y R 5/1	弥生時代または古墳時代 か	内面は土子
178		E22-E26 N0-N3	第6層	体部小片		外) にぶい褐色7.5Y R 5/4 内) にぶい黄褐色10Y R 5/3 筋) にぶい黄褐色10Y R 6/3 ～黄褐色10Y R 4/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面は土子
179		E22-E26 N0-N3	第6層	口縁部片		外) にぶい黄褐色10Y R 7/2 ～黄褐色10Y R 6/1 内筋) 灰黄色2.5Y 7/2	弥生時代または古墳時代 か	口縁部外面は土子 内面に磨きの痕跡(磨痕が著しい)
180	弥生土器高杯	E13-E18 N3-N5	第7層	口縁部片		外) 灰褐色5Y 5/1 内) 黄褐色2.5Y 5/1 筋) 黄褐色2.5Y 4/1	弥生時代中期後半	口縁部外面に刻み目 口縁部は土子
181	弥生土器鉢	E12-E13 N5-N6	第5層	口縁部片		外) 灰白色5Y 7/2 内) 灰褐色2.5Y 8/3 筋) 5Y 7/2～2.5Y 8/3	弥生時代	口縁部は土子

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	現存状況	寸法(cm)	色 票	時 期	備 考
182	弥生土器甕	E 8 - E14 N 4 - N 8	第8層	体部片		外) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰白色10Y R 7/2 底) 褐色10Y R 5/1	弥生時代	体部に編織紋あり 外面に磨き 内面はナシ
183	弥生土器高杯	E10 - E12 N 6 - N 8	第6層	口縁部片		外内) ぶい黄褐色10Y R 7/ 2 ~ 灰褐色10Y R 5/2 底) 褐色10Y R 5/1	弥生時代前期	口縁部外面は横ナシ 内面に縦方向の磨き
184	弥生土器広口甕	E10 - E14 N 8附近	第6層	口縁部片		外内) 灰黄色10Y R 5/2 底) 灰黄褐色10Y R 4/2	弥生時代後期	内内系 口縁部は横ナシ
185	土師器高杯	E18ライン	第8層	口縁部片		外) 灰白色10Y R 8/2 内) 灰褐色7.5Y R 6/2 底) 灰黄褐色10Y R 6/2	古墳時代初期	外面は横ナシ 内面に縦方向の磨き
186		E10 - E14 N 8附近	第6層	口縁部片		外) 黄灰色2.5Y 5/1 内) 暗灰色2.5Y 5/2 底) 黄灰色2.5Y 6/1	弥生時代または古墳時代 か	内面はナシ
187	弥生土器甕	E10 - E12 N 6 - N 8	第6層	体部片		外) 灰褐色7.5Y R 4/2 内) 暗褐色7.5Y R 7/2 底) にぶい褐色7.5Y R 5/3	弥生時代後期後半	近江系 体部に編織き直線紋・竹管紋・扇状紋 内面はナシ
188		E23 - E26 N 1 - N 5	第6層	体部片		外内) にぶい黄褐色10Y R 6/ 3 ~ 灰黄褐色10Y R 4/2 底) にぶい黄褐色10Y R 7/3	弥生時代または古墳時代 か	内面はナシ
189		E20 - E22 N 4 - N 6	第6層	体部片		外) 黄褐色2.5Y 8/3 ~ にぶい黄褐色10Y R 7/3 内) 灰色N 5/0 底) 灰白色10Y R 8/2	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き 内面上半にナシと下半に縦方向のハケ磨き
190	弥生土器甕	E14 - E16 N 6 - N 8	第6層	体部片		外内) にぶい黄褐色 10Y R 7/2 底) 黄褐色10Y R 4/1	弥生時代後期後半	近江系 体部外面に編織き直線紋・円形浮紋(竹管紋)・ 扇状紋・列点紋 外面に磨き 内面に縦方向のハケ磨き
191	弥生土器	E16 - E18 N 8附近	第6層	体部片		外) 灰白色2.5Y 8/2 内) 黄褐色2.5Y 8/3	弥生時代	外面は黄褐色印き目の上からハケ磨き 内面はハケ磨き
192		E14 - E16 N 4 - N 8	第6層	体部片		外) 褐色7.5Y R 4/3 内) 暗灰色2.5Y 4/2 底) にぶい褐色7.5Y R 5/3	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き 内面はナシ

番号	器 種	出土地区	層位・層階	発見状況	寸法(cm)	色 画	時期	備 考
193		E22ライン	第6層	体部片		外) ほぼ灰青色10YR 6/4 内) ほぼ灰青色10YR 6/3 断) 灰青色10YR 6/2	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面はナシ
194		E10 - E14 N 8附近	第6層	体部片		外) ほぼ灰青色10YR 7/3 内) ほぼ灰青色10YR 7/2 断) 黒灰色10YR 6/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面に粗いハコ磨整
195		E13ライン	第9層	体部片		外断) 暗灰色2.5Y 5/2 内) 灰青色10YR 5/2 断) 灰青色10YR 4/1 ~ 黒色10YR 2/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面に横方向のハコ磨整
196	弥生土器群	E23 - E25 N1 - N5	第10層	体部片		外) 灰青色2.5Y 7/2 内) 灰青色10YR 4/1 断) 灰青色5Y 6/1	弥生時代	体部に黒灰状磨きを施す 外面に磨き、内面は縦方向のナシ
197	弥生土器群	E18ライン	第10層	体部片		外) ほぼ灰青色10YR 6/3 内) 暗灰色10YR 4/1 断) 暗灰色10YR 6/1	弥生時代後期	近江系 外面に粗磨き直線状・波状状、列点状・扇状状 内面にハコ磨整
198		E12ライン	第6面直上	頸部~体部片		外断) 淡黄褐色10YR 8/3 内) 灰青色10YR 5/1 断) 黄灰色2.5Y 6/1~5/1	弥生時代または古墳時代 か	頸部に尖形体部に磨掃き直線状・波状状・竹管 付者円形浮紋
199			第6面直上	頸部~体部片		外) 灰白帯2.5Y 8/2 内) 灰青色2.5Y 7/2 断) 淡黄褐色7.5Y 8/3	弥生時代または古墳時代 か	頸部に尖形と体部に磨掃き波状状、内面はナシ
200	弥生土器群	E18ライン	層位不明	口縁部		外断) 淡黄褐色10YR 8/3 内) ほぼ灰青色10YR 7/3	弥生時代中期	内・外面とも磨き
201	弥生土器群	E4 - E12	第3層		4.1×4.8 高さ0.9	全) ほぼ灰青色10YR 7/4		高磨きを受けて灰白色・黄灰色・黒色に灰色 表面に黒色の磨掃きが付着
202	土師器		第4層 土坑2	体部片		全) 暗灰色7.5Y R 5/1		表面に黒色の付着物
203	土師器群		第4層 土坑2	口縁部1/8残存	口径11.0 高さ2.7	外) ほぼ黄褐色7.5YR 6/4 内断) 淡黄褐色10YR 8/3		表面に黒色の付着物
204	銅鑄	E19 5 - N2	第4層 帯込み3	外縁部1/15残存	6×4.5 高さ3.5		古墳時代前期	仿銅鑄 人工造的に造形、高磨を受けて表面 有蓋式銅鑄
205	銅鑄	E16 5 - N5.5	第10層	完全	全長4.8 全幅1.6 高さ3.5		弥生時代	表面に黒色の付着物 有蓋式銅鑄

番号	器 種	出土地区	層位・遺構	保存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
205	鏡裏「唐彩元寶」		第2面 ピット2	完形	直径2.43 厚さ0.18		中国・北宋代 (1040年以降)	
207	鏡裏「政口寶」		第2面 ピット2	2/5残存	厚さ0.1			政和通寶か 中国・北宋代(1111~1117年以降)
208	鏡裏「口皇通口」		第3面 ピット3	1/2残存	厚さ0.09			元皇通寶か 中国・北宋代(1078年以降)
209	鏡裏「元皇通寶」		第4・2層 E4-E12 N6-N8	完形	直径2.6 厚さ0.16		中国・北宋代 (1078年以降)	
210	石鏃		E12-E14 第3層	一部欠損	総長4.9 総幅3.7 総厚1.0			サスカイト
211	スクレイパー		第2面 塔込み2		総長4.7 総幅2.8 総厚1.1			サスカイト
212	石鏃		E18-E22 N0-N3 第6層		総長4.8 総幅5.7 総厚1.7			サスカイト
213	石鏃		E20-E21 N6-N7 第10層	一部欠損	総長4.8 総幅1.3 総厚0.6			サスカイト 尖蓋鏃
214	スクレイパー		E22-E26 第4・1層	一部欠損	総長3.3 総幅3.3 総厚0.9			サスカイト
215	サスカイト原石		E23-E26 N1-N5 第10層		総長6.8 総幅5.4 総厚1.6			
216	土師器裏		E14ライン 第9層	口縁部2/5残存	口径13.4 深さ19.3	外) 黒褐色10YR 3/1 内) 茶灰色10YR 4/1 底) 茶灰色10YR 6/1	古墳時代前期	外面裏面に横方向のハケ面整 内面はほぼへら削り 有蓋式蓋 図面提示なし
217	土師器蓋		E13ライン 第5層	口縁部1/2部残存	口径12.0 深さ18.4	外) ほぼ白黒褐色10YR 7/2 ~に近い褐色5YR 6/3 内) ほぼ白黒褐色10YR 7/2 底) 茶灰色10YR 4/1	古墳時代前期	体部外面下半部はハケ面整 体部内面は砥子 図面提示なし
218 ~ 224	土師器		第4面 土坑2	体部片	外) 赤褐色7.5YR 8/4 内) 赤褐色7.5YR 8/3 底) 灰白色7.5YR 8/2			蓋面に黒色の付着物 図面提示なし



全景（東から）



西半部（南から）



全景（東から）



西半部（南から）



全景（東から）



東半部（南から）



全景（東から）



東半部（南から）



全景（東から）



土器・木集積（北から）



弥生土器高坏(138)



弥生土器細頸壺(139)



土師器群



船形木製品(101)



自然木と弥生土器群



自然木根



小型壺(167)



金属状容器物が付着した小型丸底壺(149)



弥生土器壺(126)



弥生土器壺(103)



弥生土器・土師器群



土師器壺



銅鐏(205)



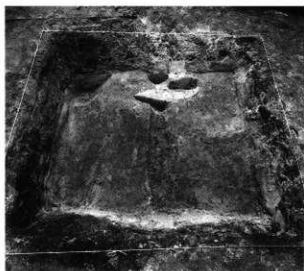
石鐏(213)



敷物状有機物



板状加工木材



第7面全景(東から)



第7面ビット群(西から)



第8面全景(南から)



第8面全景(西から)



第9面全景(西から)



第9面ビット(南から)



北壁断面 (下半部)



東壁断面 (下半部)



西壁断面に現れた噴砂 (地震痕跡)



グリッド部北壁断面



ショベルカーによる表土剥ぎ



遺構検出作業(第2面)



遺構掘り(第4面)



平板による遺構実測(第4面)



遺物出土状況の写真撮影(第6面)



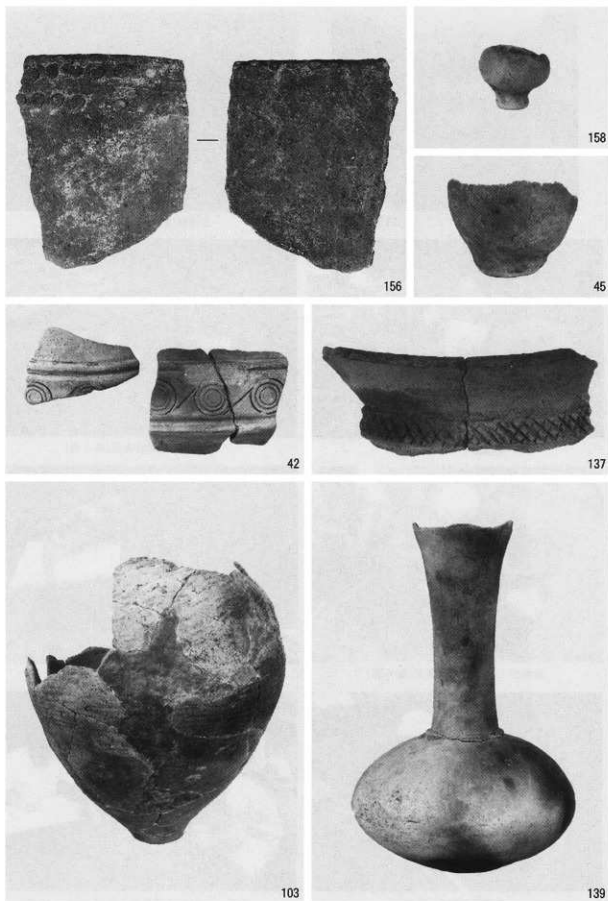
遺物出土状況の実測(第5・6面)



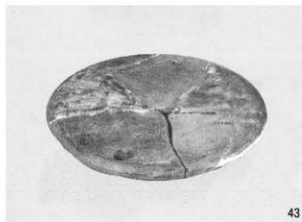
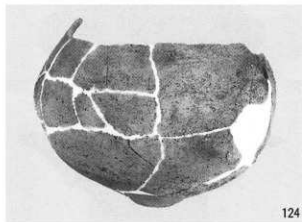
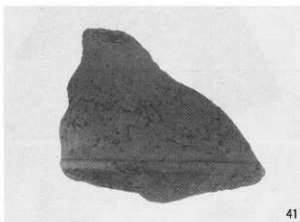
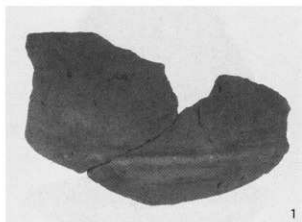
遺構断面実測(第6面)



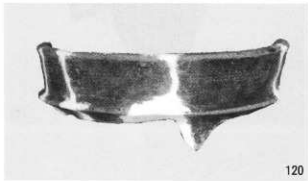
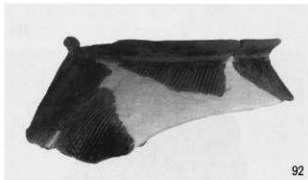
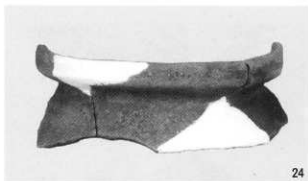
記録しながらの遺物取り上げ(第5・6面)



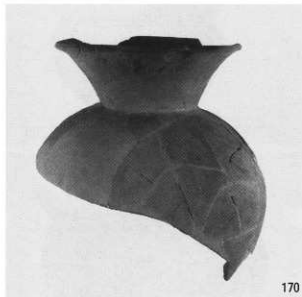
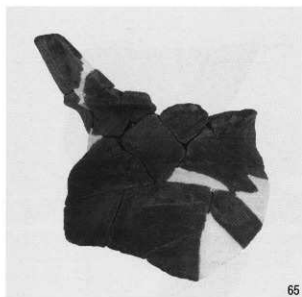
42・45：第8層 137・139：第6面 103：第9層 156・158：第10層

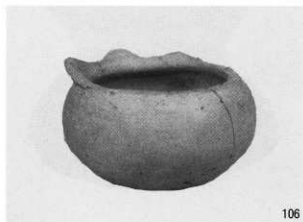
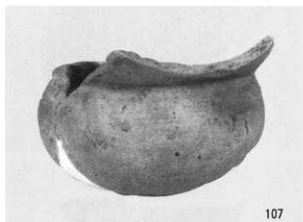
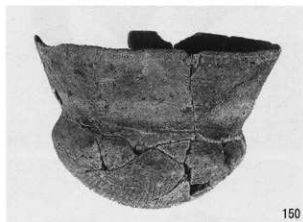
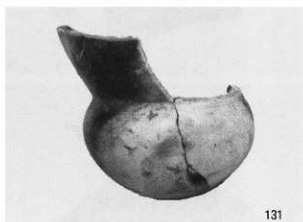
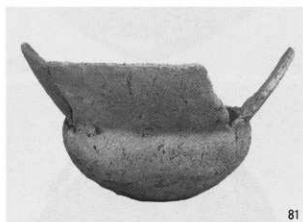
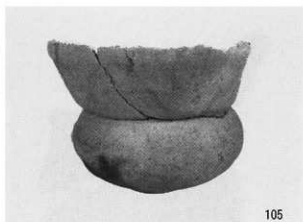


1 : 第1面落込み1 41・43 : 第8層 124 : 第5面 104 : 第9層
162・157 : 第10層 174 : 層位不明



24：第6層 71・92・93・68：第8層 127：第5面 120：第9層
152・153：第6面 17：第7面落込み5





36 : 第7層 81 : 第8層 131 : 第5面 105~107 : 第9層
167 : 第11層 150 : 第6面

